

ソ連解体後の樺太文学

藤田 祐史

はじめに

『樺太文学の旅』（一九九四）の「あとがき」に木原直彦が書いた「こんなにも樺太にかかわる文学があったのか」（下巻、四八二頁）という感慨は、一九九一年以降の諸作を読み進める身にもまた迫ってくる。李恢成『地上生活者』（二〇〇五―二〇〇六）、川越宗一『熱源』（二〇一九）、村上春樹『1Q84』（二〇〇九―一〇）、佐藤大輔『征途』（一九九三―一九九四）、そして樺太を舞台とする幾多の小説、自伝、紀行文、詩歌俳句……。この論文の主題は、ソ連解体という大きな出来事があった一九九一年から二〇二二年十一月現在にかけての樺太文学の全体像を捉え、その変遷と特性の一端について明らかにすることである。

樺太文学について川村湊は「そんなものがあったのか、という疑問が出てくるのは必定であろう」（氷の島と雪の海 樺太文学論）『南洋・樺太の日本文学』一九九四、一六七頁）と慎重な態度ながら「ただここでは、「樺太」というかつて日本の領土だった土地で、その風土と住民と精神を描き、物語った文学が

あったことを、日本の近代文学史の一ページとして記憶しておきたい」（同頁）と述べ、植民地文学としての「台湾文学」「朝鮮文学」「満州文学」と同様の枠組みでの論述を試みている。本論文では樺太文学の範囲を広く捉え、樺太を回想あるいは想像力の資源とする日本語の文学全般を対象とする。かつて樺太が「あった」ことから、あるいは今も人々の思いに「ある」ことから生じた諸作品についてやはり「記憶しておきたい」ためである。また本論では過去三十年余りの間に書かれた作品を樺太文学の戦後研究の一環として扱う。戦後の樺太文学は同地に居住者として、出稼ぎ労働者として、旅行者として関わった人たちの回想を主にした文学である。さらには未踏の樺太を各々の想像によって書こうとした人々の創作——その中には「樺太」より「サハリン」のイメージに依る文学も含まれる——も交えながら概観したい。それでは、なぜ一九九一年以降の作品が対象なのか。先行研究の要点を押さえつつ主題の背景を明確にしておこう。

樺太文学を総合的に論じた研究として、荒澤勝太郎『樺太文学史 全四巻』（岫人舎、一九八六―八七）と木原直彦『樺太文学の旅 上下』の大著二作がまず念頭に浮かぶ。『樺太文学史』はチェーホフの『サハリン島』（原著一八九五）から一九四四年までの文学について、北原白秋、林芙美子といった来島作家や同地の出身作家だけでなく、歌壇俳壇の展開にも触れた上で島の文化政策にも注目し、全四巻を通して樺太文学の営みを描き出している。一方で木原の『樺太文学の旅』は、明治期から一九九四年までの「文学者ひとりひとりの足跡と作品を、引用をまじえながらできうる限り詳しく紹介」（下巻、四八二頁）している。同書の後半には「戦後の樺太・サハリン」「今・サハリン紀行」の章も設けられ、戦後の文学についても作家単位で概括されている。両書共に個々の作品を精読して分析する性格の本ではないが、この二作によって誰によって何が書かれてきたのか全体像を捉えることができる。

その他の先行研究としては、一九九四年までの文学を対象とした先述の川村湊「氷の島と雪の海 樺太文学論」がある。荒澤、木原の大作に比べて一論文ではあるが、作品の列挙に留まらず荒澤の見解を踏まえて「流民の文学」あるいは「複数民族の文学」といった同文学の特徴を抽出している。より現在に近い時期に触れているのは北海道文学館編『アントン・チェーホフの遺産』（二〇一七）に収録のエレーナ・アイコンニコヴァ「ロシアと日本

におけるアントン・チェーホフの《サハリン島》」（工藤正廣訳）と平良一良「近代日本の文芸とサハリン（樺太）」で、島田雅彦『エトロフの恋』（二〇〇三）や多和田葉子「*Сибирь* 極東欧のサウナ」（二〇〇五）といった二〇〇〇年代の作品についても言及している。また、北海道文学館による企画展の図録『サハリンを読む 遙か（樺太）の記憶』（二〇〇九）は二〇〇九年までの樺太関連の書籍を多数の写真付きで分類・紹介する。同書の終章「サハリンの今へ：」では戦前の記憶を共有しない旅行者が増えつつある樺太／サハリンの現況を踏まえて、新たな紀行文やガイド本が提示されている。他に池田裕子の論文「日本における近代サハリン・樺太史研究の動向その2 社会・文化」（『北方人文研究』一三号、二〇二〇・三）が文学研究の動向について三十行ほどの叙述で適格に総括している。

さて、ここまでの研究状況を踏まえ、樺太文学研究に欠けている点を三つ挙げてみたい。

- ・戦後、殊に一九九五年以降の全体像を捉える研究がないこと。
- ・他領域にも通じる理論を用いた分析や他領域の知見を活かした研究が数少ないこと。
- ・個々の作品を精読・分析し、その現代的意義を開示していく研究が数少ないこと。

一点目が、本論文で補おうとする課題である。本論ではソ連解体後に出版された作品を分類・分析の対象とする。私自身は

樺太文学の戦後研究を志向しているが、その土台づくりとして九〇年代から現在に至る全体像を知りたい。幕参団等の一部を除けば入国さえ困難であったソ連の時代が終わり個人での旅行者も行き来できるようになる前後から、往時を回想する自伝が私家本を含め次々に上梓され、ソ連占領下での暮らしや引揚げの体験が語られた。また、同時期には架空戦記というジャンルが盛り上がり、樺太／サハリンがその想像力の舞台に選ばれはじめる。本論では次節以降、この三十余年の間に樺太に関連して何がどのように書かれたのか、以前の作品と何が異なるのか、理解を深める。

二点目は、樺太文学研究が狭い領域の研究に留まり——日本文学の周辺にある植民地文学研究のさらに周辺にある樺太文学の研究というように——他領域と十分に接続されていない懸念である。それに対して歴史学、移民研究、言説分析などと結びつける視点や、樺太文学だからこそ提起できる問題の明示が必要となる。本論ではこの解決に至っていないが、文学ジャンルごとに特性をまとめるなかで他の文学研究との接続点を模索——例えばSFや自分史の研究との接続——したい。

三点目は、作品を精読して新しい読み方¹¹ 価値を示すという基礎的な文学研究がそもそも足りていないという現況である。

これまでに個別の作家・作品の研究として、神谷忠孝による本庄陸男論¹²、格清久美子による讓原昌子論¹³等が書かれ、他にも宮

沢賢治、山口誓子のような名の通った作家について彼らの文学にとつて樺太／サハリンとは何か、が論究されている。しかしながら、神沢利子、中田敬二、吉田知子といった戦後に台頭する樺太に縁の深い作家を扱う論述は僅少であり、今後の研究が期待される。また、既に論じられている作家・作品であっても、例えば李恢成にとつての樺太とは何か、村上春樹『1Q84』にとつてのチェーホフ『サハリン島』とは何か、ではなく、樺太文学にとつて李恢成や村上春樹の小説とは何か、と樺太文学から問い返すことで、作家・作品への読解が深まる可能性も残されている。この点は本論で解決に取り組み問題ではなく今後の課題とする。

以下の論述は、第一節で小説、第二節で自伝、第三節で紀行文、第四節で詩歌俳句及びその他のジャンル別に、一九九〇年以前の作品についても各節内で簡単に触れた後、対象とする時代の代表作と特徴をまとめていく。また、資料として一九九一年以降出版された単行本の年表を末尾に付す。本文で論じきれない課題は多く、かつ一論文としては対象の幅が広く、結果として今後の研究のためのノートに近い位置づけになるが、探究の礎を築くことができらばと思う。

第一節 小説

小説から始めよう。樺太文学のなかでも小説は最も多彩な試

みがなされたジャンルであり、作品の数も多い。そのため、自伝的小説、歴史小説、架空戦記・SF、その他の小説の四つに分類して論を進めたい。

『自伝的小説』

戦前戦後問わず、自伝的な性格の強い小説が書かれてきた。島としての樺太の北緯五十度以南が「日本」となる日露戦後、岩野泡鳴（一八七三生）が蟹の罐詰事業に乗り出た顛末を振り返る『放浪』（一九一〇）、王子製紙豊原工場に勤務していた本庄陸男（一九〇五生）の「けむり」（一九三五）、八木義徳（一九一一生）が罐詰工場での短期の苦役体験を描く『海豹』（一九三七）等、樺太での事業・労働を書いた作品が並ぶ。また、必ずしも自伝的ではないが、寒川光太郎（一九〇八生）の『草人』（一九四〇）は植物学者であった父を主題にし、幼少期から上京する一九四一年までの三〇年ほどを樺太に暮らした讓原昌子（一九一一生）は母の姿を子ども視点で『朔北の闘ひ』（一九四三）に描くなど、開拓者たちの営みが植民者二世二世あるいは旅行者の作家によって表現されている。戦後はどうか。

・吉田知子「豊原」（一九六七）

・李恢成「またふたたびの道」（一九六九）

吉田知子（一九三四生）は一九四五年の早春に父の仕事に伴い樺太に渡っている。樺太庁のあった町の名の短篇「豊原」は

その年の敗戦から一九四七年三月の引揚げまでの日々を伝える。小説は十四歳の「僕」という少年が主人公ではあるが、後の隨筆「サハリンでの一年」（一九八八）に語られる記憶との重なりから見て自伝的小説に挙げてよまろう。

李恢成（一九三五生）、イ・フェソンは樺太の真岡町の生まれ。

「またふたたびの道」は樺太から北海道へ引揚げた後の家族の生活を、樺太の回想を交えながら伝える。このように戦後の自伝的小説になると事業・労働・開拓の場面が減少し、主に植民者二世が子ども立場から家族、留め置かれた二年間、引揚げ、引揚げ後の暮らしを語り始める。

それでは、本論の対象である九一年からはどのような変化が見られるのか。三作を挙げてみる。

・佐藤れい子『ロスケタンポポ』（一九九二）

・渡辺毅『ワカソの棲む湖』（一九九二）

・李恢成『地上生活者 全六部』（二〇〇五—二〇一〇）

李恢成について先に補足しておく、彼は出世作「またふたたびの道」の後、九〇年代に入ってから樺太に関する小説を書きつづけた。樺太から強制送還される朝鮮人を書いた『百年の旅人たち』（一九九四）や慰霊碑を訪ねる戦後五十年の旅を背景にした『八月の碑』（一九九六）、そして自伝的小説『地上生活者 全六部』（二〇〇五—二〇一〇）が近年完結している。樺太文学にとって彼の文学は「引揚者」「子ども」の視点という戦後の

樺太文学、植民者二世の文学に共通する特徴を發展させてきたことに加えて、「朝鮮人」という視座によって他の作品を照らす特異な位置を占めている。彼については紀行文の節でも改めて触れたい。

佐藤れい子（一九三二生）は豊原の生まれ、一九四五年八月に北海道へ引揚げ。子ども時代の引揚げ体験を語るだけでなく、『ロスケタンボボ』所収の短篇「北じるし」「異郷の樞」では戦後の日本を生きる「引揚者」の心情がきめ細かに書かれている。その傾向は後の短編集『おくつき』（二〇〇四）所収の「おくつき」「白の道」等でも変わっていない。樺太を離れた者たちの「その後」の生に重きを置く点は李恢成の姿勢とも重なる。

渡辺毅（一九三四生）は「日本への引揚げは四十八年の夏であったから、敗戦後三年間、つまり十二歳から十四歳までをソ連政府の統治下で生活した」⁹⁰。彼の『ワカソの棲む湖』所収の同名の小説も『ぼくたちの（日露）戦争』（一九九六）所収の各短篇も、長編『少年たちの樺太 マイとユンジの約束』（一九九九）も子どもの視点から樺太での生活、引揚げまでのロシア人との関係、そして残留朝鮮人・韓国人の二世世代とのやり取りが想像も重ねて書かれている。こうした子どもの視点による叙述は吉田知子、李恢成の書く小説の一部と同様である。

では、自伝的小説に関してソ連解体後の大きな変化はないのか。ソ連の侵攻から引揚げに至るまでの期間の回想が主であり、

「子ども」の視点があり、引揚げの後の「引揚者」の心情が書かれていることに変わりはない。異同が認められるのは書き手たちで、佐藤れい子も渡辺毅も吉田知子や李恢成といった作家と同年代ではあるが、九〇年前後から小説を書きはじめている。このように自伝的小説の書き手たちは次節で紹介する自伝の書き手たちと同様、戦後四十年、五十年と経ってから筆をとりはじめた者が大半であり、職業としても所謂プロの作家ではない。このようなアマチュア作家たちが登場してくる背景の一つには、足を踏み入れることの叶わなかった樺太／サハリン行きが可能になり、かつ戦後五十年という時節が記憶を語る行為を促したように映る。この書き手の問題については、次節の自伝をまとめる際に改めて触れたい。さらに一挙挙げる。

・工藤威『遙かサハリン島』（二〇〇五）

工藤威（一九四三生）は樺太の生まれであるが、その暮らしが鮮明な記憶として残る世代ではない。小説では母が語る樺太の生活と八〇年代の日本の主人公の生活が交錯して語られる。戦後も自らのうちにのこる「樺太」を探り当てようとする態度は、後の作品集『木漏れ日』所収の短篇「疵痕」（二〇一二）等にも確認できる。こうした父母あるいは祖父祖母の経験の叙述や自らのルーツを求める心情は自伝的小説に関わらず、九一年以降の樺太文学に散見される。

ソ連解体後の自伝的小説の特徴をまとめる。「回想」が主であ

り、書き手は一九三〇年代生まれの者たち、植民者二世が目立つ。「子ども」の視点からの語り、幾つかの作品では一九四五年前後と執筆当時とを途中で往還する語りが見られる。また、その対象としては樺太の自然、家族といった戦前の小説からのモチーフに加えて、引揚げの経験、ソ連占領下の暮らし、朝鮮人やロシア人の姿、さらには引揚げ後の「引揚者」の心情という戦後の自伝的小説に共通するモチーフが作家ことに展開されていた。

《歴史小説》

一九九〇年以前の歴史小説の代表作を挙げてみる。

・三浦綾子『天北原野』（一九七六）

・吉村昭『間宮林蔵』（一九八二）

三浦綾子（一九二二生）は大正末期から一九四五年の北海道と樺太を舞台に『天北原野』を書いた。戦後の樺太文学では往々にして日露戦争後に樺太に渡った開拓期の人々の生活が題材となる。自伝的小説と異なり作者自身の経験に依らないのが特徴で、移住から引揚げにいたるまでの植民者一世の歩みが取材を踏まえた想像力によって語られる。

吉村昭（一九二七生）は間宮海峡の名を今に残す間宮林蔵の姿を小説化している。樺太に関わった探検家たちのなかでも間宮林蔵は池波正太郎「北海の獵人」（一九六八）のように戦後を通して幾度も小説の資源になり、その道程の舞台である樺太も

併せて表現されてきた。吉村は他にソ連軍による侵攻後の悲劇を伝える「鳥の浜」（一九七二）や「脱出」（一九八二）も書いており、北海道を含む「北」への関心を示している。

それでは、ここ三十年余りの歴史小説はどうであったのか。いずれも長編の三点を挙げよう。

・辻真先『サハリン脱走列車』（一九九七）

・熊谷達也『氷結の森』（二〇〇七）

・川越宗一『熱源』（二〇一九）

辻真先（一九三二生）は「サハリン脱走列車」について「ヒトラーの子を身ごもった？日本の少女をめぐるアクションで、敗戦と同時に国家の正邪が逆転する皮肉をこめて、北海道・宗谷海峡・樺太を往来する冒険小説だ。豊真線の大ループを舞台に書いてみたかった列車活劇でもある」と自ら記している。同作は執筆当時の時代と一九四五年の樺太での出来事が交差して語られる歴史ミステリとして読むこともできる。この小説で注目したいのは朝鮮人の姿が書かれている点に加えて、豊真線（ほうしんせん）という今は失われた鉄道路線が創作のための資源として選ばれている点である。樺太の鉄道は宮沢賢治『銀河鉄道之夜』の人氣——賢治自身は一九二三年八月の樺太を旅した——もあって、近年の樺太紀行文では時折言及される。この小説はその鉄道に加えて樺太の歴史、作者自身の旅の経験、そして主たる資料として使われた中尾重一『望郷／樺太鉄道回顧史』

(手書きノート)が絡み合い、スケールの大きな物語へと昇華されている。

熊谷達也(一九五八生)は『水結の森』をマタギ三部作の三作目として上梓している。近世の探検あるいは一九四五年前後に焦点が当てられやすい樺太の歴史小説のなかで、日露戦争に出征した秋田のマタギを樺太へ、物語の終盤には「シベリア出兵」を背景にしたニコラエフスクへ移動させる独自の時空間の設定が見られる。先の辻の小説が樺太と北海道・東北との連なり、あるいは同地に生きる朝鮮人の姿を示したとするなら、熊谷はサハリンと大陸とのつながりを示し、また、同地に生きるニプフに焦点を当てる。なお、熊谷自身もシベリアを旅して厳冬期の間宮海峡を越えており、そうした経験も作中の自然描写等に活かされている。

川越宗一(一九七八生)は『熱源』において、樺太出身のアイヌのヤヨマネクフ(山辺安之助)、少数民族の研究者として名高いポーランド人のプロニスワフ・ピウスツキという実在した二人を主役に据えた。直木賞受賞の同作は日露戦争以前の流刑地であった時代から一九四五年までの半世紀を超える時間を物語る。辻や熊谷の小説が朝鮮人や少数民族に注目しながらも「日本人」を話の中心に据えていたのに対して、『熱源』の「日本人」は傍役である。小説では樺太アイヌの運命、ロシア革命、さらには南極探検と、樺太を主舞台にしながらも語りの視点は拡大

し目まぐるしく変転する。

さて、ここまで紹介した三作に共有する特徴を一つ挙げると、自伝的小説では表現されることの僅かであった少数民族の前景化が目立つ。後に見る自伝にも言えることだが、自伝的小説では朝鮮人、ロシア人が登場することはあっても、ウイルトア、樺太アイヌ、ニプフが主要人物として描かれる例は数少ない。理由の一つとして樺太の少数民族はオタスの杜のような限定された居住区を指定され、複数の地域では「日本人」との共生に至らなかったためであろう。しかしながら、歴史小説のなかで樺太の少数民族は作家たちの想像力の資源になり、小説に欠かせないモチーフとして躍動している。

その他の歴史小説についても若干触れておく。蛭ヒカルは『八月のイコン』(二〇一七)『日記』(二〇一八)『鞆岬海峡の月』(二〇二一)において樺太、殊に「三船殉難事件」——一九四五年八月二十二日に引揚げ船の小笠原丸、第二振興丸、泰東丸の三隻がソ連潜水艦の魚雷攻撃を受けた事件——に関する小説を書いている。なお、この三船の事件はジュンモノエの「やまね雨」(二〇二二)でも語られるように、真岡郵便電信局の自決同様、樺太の歴史を語る際の象徴的出来事になっている。また、吉村昭をはじめ戦後の歴史小説家たちが書いてきた探検家たちの伝記も継続的に書かれており、北方謙三『林蔵の貌』(一九九四)、乾浩『北夷の海』(二〇〇二)等が出ている。

ソ連解体後の歴史小説の特色をまとめる。書き手は樺太を出自とせず、所謂「当事者」ではなく、それぞれの関心——鉄道、マタギ、樺太アイヌ——を経て自らの樺太／サハリンという空間に辿りついている。「複数民族」が強調され、「日本人」の視点以外での語りも試みられる。また、日露戦後から引揚げに至る時期の樺太から大陸にかけて、というように自伝的小説に比して広大な時間・空間が選択されている。樺太に関する自伝的小説や自伝が今後減少することは必然的な現象であろうが、「歴史」になった樺太は作家たちの想像力を刺激し新しい同地の物語を創出してている。

《架空戦記・SF》

ここまで見てきたような樺太を舞台にした自伝的小説や歴史小説の全体像は、樺太文学と聞いて予想される大方のイメージ通りなのかもしれない。しかし、樺太／サハリンを舞台に架空戦記や広義のSFが何冊も書かれていると聞くといかがだろうか。なかでも架空戦記は同ジャンルを牽引した荒巻義雄『紺碧の艦隊』（一九九〇—一九六）において作中の首相が亡命ユダヤ人のために南樺太を割譲、東方エルサレム共和国が建国される世界を仮想したように、樺太が物語上重要な土地として頻繁にあらわれる。一作挙げる。

・佐藤大輔『征途』（一九九三—一九四）

佐藤大輔（一九六四生）の『征途』は一九四四年から一九九五年にかけての「分割された日本」の存在する世界が舞台である。「豊原は、赤い日本最大の都市であると同時にその首都でもあった。総人口が二〇〇〇万に満たない国家でこれ程の人口集中であるから、比率的には東京より極端な一極集中状態だ⁸⁾」とあるように、史実において樺太庁が置かれた豊原の町は、作中「赤い日本」＝日本民主主義人民共和国の首都であり、南側の首都東京と対比されている。『征途』の精読と分析は挑戦したい課題ではあるが、ここでは同ジャンルと樺太の関係の概括に進もう。

架空戦記とは歴史のIFを書く小説であり、仮想戦記、戦略シミュレーション小説とも呼ばれ、時にSFの下位ジャンルとして扱われる。主に第二次世界大戦の改変が仮想され、史実とは異なる戦略がとられていたら、異なる兵器が使われていたら、現在の自衛隊がタイムトラベルで過去に赴いたら、と「もしも」の世界が戦闘場面を伴って描写される。樺太が登場する九〇年代以降の例を幾つか挙げていくと、先に挙げた『紺碧の艦隊』から始まり、南樺太攻防戦を描く矢矧零士、秋月達郎『修羅の艦隊6 満州・樺太 大激闘』（一九九八）。また、樺太の油田をめぐる一九四一年に日本とソ連が戦争状態になる菅谷充『霸王の連合艦隊』（二〇〇七）。それから、横山信義『樺太沖海戦1 鋼鉄の海嘯』（二〇〇八）や羅門祐人、中岡潤一郎『異史・

第二次大戦 4 樺太奪還作戦! (二〇〇八) においても一九四〇年、四一年という時代にソ連との戦争が起こる世界が空想され、特に後者では領土を巡っての激戦地の一つとしての樺太が描き出される。このように複数の架空戦記を並べてみると、同ジャンルにおける樺太はソ連・ロシアとの紛争地であり、日本が奪還すべき土地としてのイメージが付与されている。それではこうした作品をどのように扱い、読み解いていけばよいのか。

架空戦記の読者の興味としては、軍事技術への関心があり、作者の示す歴史認識への共感があるのだろうが、同時にそこには対ロシア(ソ連)意識が貫かれている。こうした対ロシアを書く文学作品は遡れば近代のはじまりから書かれてきた。

明治期に書かれた未来戦記で、最大の「仮想敵国」とされていたのはロシアだった。特に日清戦争後、三国干渉や南下政策への反発から、対ロシア戦争が国民に意識されるようになっていくと、対露未来戦記もいちだんと数を増した

上記は長山靖生『日本SF精神史 幕末・明治から戦後まで』(河出書房新社、二〇〇九、一〇五頁)からの引用である。長山は「対露未来戦記」の例として、不二山人「壮絶快絶 日露戦争未来記」(一九〇〇)など九つの作品を示し、その代表作に東海散士『日露戦争 羽川六郎』(有朋堂、一九〇三)を挙げている。樺太を関連づけても、百年以上前に書かれた『羽川六郎』は「樺太奪還物語」として読み得る小説である。「架空戦記」と

の差異としては、明治期の「未来戦記」は来たるべき日露戦争を想像した文学であって、第二次世界大戦をやりなおすといった過去改変の文学ではなかったことであろう。「あり得る」未来の物語から「あり得た」過去の物語へ。後者の発生理由としては冷戦下と経済成長著しい日本の自負、その後の発展は戦争を語る自伝的小説や自伝と同様に一九五年前後という回想が頻繁に語られる時代背景が考えられるが、こうした論証は具体的な作品の精読と共に行われるべきであろう。ここでは九一年以降の樺太に関する小説で「未来」を書いた別の作品の概括に向かいたい。

広義のSF、近未来を想像する樺太文学も幾つか出ている。例えば、土居良一は長編『ネクロポリス』(一九八九)を加筆解題の上『過去からの追跡者』(一九九四)として改めて発表している。同小説は近未来の核廃棄場となったサハリンが舞台であり、そこに世界中の犯罪人が隔離、幽閉されている。他に治安の悪化した日本領サハリンという設定の地本草子『子どもたちは狼のように吠える』(二〇一六)、ソ連に占領された北海道という近未来が舞台の古川日出夫『ミライミライ』(二〇一八)——部分的な過去の描出ながら樺太が登場する——と「あり得る」未来の描写がつづく。どの作品も空想による小説ではあるが、樺太/サハリンが流刑地であった歴史やソ連の侵攻といった史実との連続性も見出すことができるだろう。

以上、架空戦記・広義のSFに分類される作品を追ってきたわけだが、「回想」や「歴史」を軸にした自伝的小説や歴史小説とは別に、一種の境界に対して各々の「空想」を展開する文学の存在を聊かではあるが示せたかと思う。なお、樺太文学についてSFという視点を用いて論じる方法は、岡和田晃編『北の想像力《北海道文学》と《北海道SF》をめぐる思索の旅』（寿郎社、二〇一四）にも一致する。樺太文学と北海道の関係を論じる準備はないのだが、ロシアによる北海道への侵攻を書く砂川文次『小隊』（文藝春秋、二〇二二）、満州を舞台に日露戦争から第二次世界大戦の時期を仮想する小川哲『地図と拳』（集英社、二〇二二）のような近年の創作を思い浮かべるなら、ここまで論じてきた事柄が樺太文学だけの特徴ではないことにも気づかされる。ここでは「あった」ことを語るその特性とは別に、「あり得た」「あり得る」を語る「空想」の文学としての側面が戦後の樺太文学にも確かにあることを押さえ、次に進みたい。

《その他の小説》

小説の最後に、その他の作品について見ておこう。具体的には純文学に分類され得る作品、ミステリの順にまとめていく。まず二作品を挙げる。

- ・黒川創『イカロスの森』（二〇〇二）
- ・工藤正廣『チェーホフの山』（二〇二〇）

黒川創（一九六一生）は『外地』の日本語文学選² 満州・内蒙古／樺太（新宿書房、一九九六）の編者であり、その「はじめに」で「この島で、日本語の文学は、何を経験し、何を経験しそこなったのか」（同書、四頁）と問題提起している。「イカロスの森」は北サハリンを舞台にした「日本時間の二〇〇一年九月一日、午後三時から数時間の間の主人公による回想」と作者が書くように、回想の文学であり、旅の文学でもある。ロシア人の運転手と日本人作家の交流、オハという樺太文学では稀な北サハリンの土地、「死の黒い湖」と呼ばれる石油について……。「ものごとを国境の両側からとらえるのは、とても難しい¹⁰¹」とは作中人物の述懐だが、作者は同小説を書くことで樺太文学が「経験しそこなった」ことを、「ものごとを国境の両側からとらえる」ことよって経験し直そうとしているように映る。

工藤正廣（一九四三生）はバステルナークの研究および翻訳で著名なロシア文学者であり、詩人、小説家でもある。『チェーホフの山』はガスパジン・セツソン（Mr. 雪村）による一九九〇年代のサハリン／樺太の旅を書いた長編で、背景にはチェーホフによる一八九〇年の旅がある。作中では時を超えて、チェーホフが調査した民の末裔たちが語りはじめる。流刑史、ピウスツキ、ニプフ自身の語り……。『精神の継承』（二五九頁）という言葉が作中にあるように、チェーホフをいかに継ぐのか、彼が見出した「人間」がいかに継がれていくのか、が探究される。

なお、チエーホフの『サハリン島』は度々樺太文学の資源になっており、九一年以降でも島田雅彦『エトロフの恋』（二〇〇三）、多和田葉子『US+SR 極東欧のサウナ』（二〇〇六）、村上春樹の『1Q84』（二〇〇九―一〇）でも言及され、特に『1Q84』では小説の展開上大きな役割を果たしている。

次にミステリについても触れておく。樺太に関連する戦前の代表作として久生十蘭『海豹島』（一九三三）があり、オタスの杜や国境と並んで当時の名所であった海豹島を舞台に同島で起きた事件を書いている。樺太を訪問しての取材作ではなく、樺太の「観光地」を資源に用いた奇譚で、前年に夢野久作がハルピンを舞台にした「氷の涯」（一九三三）を書いていることを思い合わせる、「外地」への関心の高まる時代に作家が応じた作品とも見える。同ジャンルの戦後、ソ連解体後の作品は僅かではあるが、内田康夫『氷雪の殺人』（一九九九）、桜木紫乃『凍原』（二〇〇九）が挙がる。後者は現代を舞台にしながらも一九四五年度の樺太の情景も描いており、現代と過去を往還するミステリとしては辻真先『サハリン脱走列車』、引揚げ者の過去が物語の展開に関わってくる点では島田莊司『奇想、天を動かす』（一九八九）にも通じている。今後この分野で樺太文学が書かれるとすれば過去の因縁を絡ませた構想や歴史ミステリが主となるのか。

以上、自伝的小説、歴史小説、架空戦記・SF、その他の小説に分けて全体像を追ってきた。ここからソ連解体後に書かれた小説の特徴を三点にまとめてみる。

一つ目は、樺太に関する小説は「回想」が主であること。個人的な記憶が自伝的小説によって語られ、事実に基づく歴史小説は想像力を織り交ぜながら新しい物語を紡いでいた。また、回想の書き手たちは植民者一世たちから二世が中心になり、子どもの視点での語りへと変化している。書き手の変化については次節以降の自伝や詩歌俳句にも共通する特徴である。

二つ目は、複数の民族が表現されていること。これは川村湊の「複数民族の文学」という指摘の継続である。例外はあるものの自伝的小説ではロシア人と朝鮮人、歴史小説ではロシア人と朝鮮人に加えて樺太アイヌとニプフとウィルタ、架空戦記では若干のロシア人、その他の小説では歴史小説と同様に複数の民族がしばしば登場する。

三つ目は、境界としての樺太が多様な「空想」を引き込んでいること。稚内から島影を望むことができる距離にあるはずの同地が大抵の日本人の意識に上らない状況が常態になって久しい。結果として、想像の地図上の余白になった地帯は多様な「もしも」を呼び込み、時に東エルサレム共和国になり、日本民主主義人民共和国の首都を内包する島に化したことは確認してきた通りである。

第二節 自伝

前節では樺太に関する小説の特徴として「回想」「複数民族」「空想」といった言葉を並べたが、戦後幾冊も書かれた自伝もまた回想し、時に複数の民族を描写している。自伝は既に挙げた自伝の小説とも重なるジャンルではあるが、ここでは自らの経験に基づく事実を後世に伝えることを目的に書かれた文章を自伝とし、自伝史、ひいては聞き書きの一部も含有しながらその全体像を捉えてみたい。

はじめに樺太に関連する自伝が書かれはじめる背景について押さえておこう。自伝史についての精密な研究書である釋七月子『自伝史』は語る。戦争における記憶、自伝史における虚構、台湾日本語世代の自伝史（晃洋書房、二〇二〇）によると、自伝史が定着する経緯において一九八四年から八六年の三年間が重要であり、「この時期は、出版システムや自伝史の支援サービスが確立される時期であり、その結果自伝史が大衆の広がりを見せた」（同書、一二二頁）。なお、このジャンルは私家版（ここでは作者が発行者の本）が多く、他にも「東京豊原二校会」「散香中学・女学校同窓会」のような同窓会及び各団体編の文集類に収められた手記も数多くあつて未見の文章が何点も残る。よって本論の以下の叙述は出版社から刊行された書籍に限り、その特徴を抽出するに留める。まず戦後の代表作を挙げる。

・神沢利子『流れのほとり』（一九七六）

神沢利子（一九二四生）は「くまの子ウーフ」シリーズ等で

著名な児童文学者で、『タランの白鳥』（一九八九）、『いいことってどんなこと』（二〇〇一）のような樺太と関係の深い児童書も書いている。『流れのほとり』は樺太で過ごした子ども時代の出来事と家族の姿を少女「麻子」の視点から回想する。このような子ども視点と家族の生活が語りの中心になる点は他の自伝の多くと一致しており、同書では一九三〇年代の炭鉱町、学校、樺太特有の自然、国境見学、朝鮮人、オタスの杜などが回想されている。他の自伝との違いとしては戦争を語る要素がないことで、ソ連軍の侵攻、引揚げ、ロシア人との共生のような後の自伝に見られる話題は作者が一九三七年に上京しているため書かれていない。

それでは九一年以降にはどのような自伝が書かれたのか。植民者一世あるいは就業者の自伝、二世の自伝、「複数民族」の自伝の三つに分けた上で幾つか例を挙げながら特徴を見ていく。

《植民者一世、就業者の自伝》

・阿部一男『混沌の日々 嗚呼、樺太庁警察官練習所』（一九九一）

・松田静徳『サハリン抑留七百九十八日』（二〇〇七）

阿部一男（一九一八生）は一九四三年に樺太庁巡查として渡樺。自伝『混沌の日々』には個人の経験だけでなく、樺太警察

の沿革や一部戦闘の記録、関係者の短歌なども引用されている。作者にとつて忘れ得ぬことのみでなく「樺太警察にとつて忘れてならぬ」ことを記述しており、歴史叙述寄りの自伝と言える。

松田静徳（一九二〇年生）は三歳で家族と樺太に渡り、一四一年から国境警備に従事している。その半生は「樺太ものがたり」（一九九五）「樺太ものがたり 続」（二〇〇五）にも詳しい。この世代には本人が書き残していた文章を家族が出版する例も見られ、自身の経験や調査も交えながら父の記録をまとめた道下匡子「ダスピターニヤ、わが樺太」（一九九六）、尾崎幸信「樺太開拓にかけた男」（二〇〇七）等が刊行されている。

さて、阿部や松田の自伝のような樺太で何らかの仕事に従事していた人たち、あるいは植民者一世に当たる人たちの著述は九〇年代以降減少していく。阿部も松田も樺太での就業経験者ではあるが、大半の植民者一世の世代よりは年少である。樺太の生活を伝える彼らの文学は、自伝・自分史の出版が広く実現されはじめる時代に合った例であり、歴史資料としても貴重である。特徴としては、樺太での一時期の経験に焦点を当てた自伝が多いこと、書き手は男性中心であること等が挙げられるようだが、これらは八〇年代以前の自伝も併せて今後実証すべき事柄であろう。次に植民者二世の自伝についてやはり具体的作品を挙げて見ていく。

《植民者二世の自伝》

・小池省二「樺太 戦禍の町で」（一九九六）

・時田政美「サハリン・郷愁の地へ」（二〇〇八）

小池省二（一九三五生）は樺太北方の町恵須取の生まれ、さらにその北の塔路にて終戦を迎えている。「一九四五年（昭和二十年）八月十六日未明、南樺太（サハリン）西海岸の国境に近い塔路町（とろろ）シヤフチオルスク）の市街地は、侵攻してきたソ連軍の猛空爆を受け、廃墟と化した」（二六頁）。このように樺太に関する戦後の自伝では往々にして、八月十五日という日付の後の戦争が回想される。小池の叙述は事実の調査も踏まえながら、自ら目撃したのではない町長の死や引揚船の沈没なども語り、その後約二年間のソ連の占領から引揚げ後の生活までを書く。

その間は実に地獄を見るような思いをした。食べる物がなくて、飢餓状態にさらされたからである。そんなことでほかたち家族においては、以後も戦争状態が継続していたと言ってもよいかも知れない

上記は小池と同じ世代、二十二年の秋の引揚げまで「足止め」にあつた奥田博昭「サハリンの少年 北の家族の敗戦日記」（一九九五、二四二頁）からの引用である。植民者二世の自伝は何よりもまずソ連の侵攻とその後の二年間余りの期間を伝える作品が目立つ。他にも十六歳で兵士の一員として招集されていた

山口幹夫『少年Y 八百余日の軌跡』(二〇〇五)、八月二十二日の豊原の空襲やその後のロシア人との関係を書く井戸田博子『想い出の樺太』(二〇一五)等も戦争を体験した地域ごとの差を示しつつ同時期の経験を伝えている。

時田政美(一九二八生)は小池らと同様、終戦前後の樺太を書くと同時に、引揚げ後の生活、慰霊碑建立の運動、樺太に残らざるを得なかった朝鮮半島を出自とする人々との交流を書く。樺太に関連して戦後に活動をつづけた人の自伝としては他にも渡辺祥子『魚と風とそしてサーシャ わたしはサーシャ』(二〇一三)がある。渡辺は一歳から三歳までを過ごした樺太の記憶ではなく、樺太からノリリスクに送られて亡くなった父をはじめとする抑留者のための慰霊碑建立の活動を中心に綴る。本論の第一節で歴史小説を挙げた際にシベリアと樺太を横断する熊谷達也や川越宗一の作品を提示したが、自伝でも戦前と戦後、樺太と大陸を結びつけていく試みが生き方として示されている。

なお、小池も時田も自身の著作を自分史と呼び、記憶を他の歴史書、回想等から補充しつつ書いている。この点は多かれ少なかれ植民者二世の自伝の特徴でもある。この世代の自伝の内容は、先に挙げたソ連による侵攻及び占領期の記憶が主であることを別にすれば様々であるが、女性の書き手が増加したこと、自らの経験だけでなく父、母の生涯を主題にした作品が出てくることも特徴として挙げておこう。

《「複数民族」の自伝》

・李炳律『サハリンに生きた朝鮮人 デイアスボラ・私の回想 記』(二〇〇八)
・安部洋子『オホーツクの灯り 樺太、先祖からの村に生まれ て』(二〇一五)

李恢成が自身の民族の視点から小説を書いたように、各々の民族の立場を意識しながら日本語で書かれた自伝が戦後出ている。田中了とダーヒンニエニ・ゲンターヌの共著『ゲンターヌある北方民族のドラマ』(一九七八)はノンフィクションの形式で、一人のウイルトアの樺太及び戦後日本での活動を伝える。こうした「複数民族」の姿は植民者一世、二世の自伝でも抑留下でのロシア人、朝鮮人との交流としては書かれていた。一方、自伝的小説と同様に「日本人」の自伝では樺太アイヌのような少数民族の姿に焦点を当てて語られること自体が稀であったわけだが、ソ連解体後の自伝ではどうだろうか。

李炳律(一九二六生)は一九二九年に渡樺した「朝鮮民族である。一九五四年からソ連公民で、今ではロシア公民である」(『サハリンに生きた朝鮮人』三一八頁)。その著書は第一部「日本編」第二部「ソ連・ロシア編」と分かれており、二部の長さが「日本人」の自伝との差異を際立たせている。「この島の来し方をまるごと記録して世界にのこそう」という恨の精神でつらぬかれていたのではあるまいか(同上書、四頁)と李恢成が言

葉を寄せるように、樺太／サハリンの八十年近い移り変わりが回想されている。李炳律のように「日本人」の引揚げが認められた後も残留せざるを得なかった朝鮮人の自伝については聞き書きのかたちではあるが、李義八「遺言」「樺太婦還在日韓国人会」会長、李義八が伝えたいこと」(二〇一九)も書かれている。

安部洋子(一九三三生)は、自らの俳句を引用しながら自伝を書いている。そこには樺太での家族との生活、一九四八年に漸く許された引揚げ、その後の生活、半世紀ぶりの帰郷、と他の植民者二世の自伝と一見変わらない叙述がなされている。しかし、同書に付せられた田村将人「樺太アイヌ150年——安部洋子さんの家族の歴史」と読み合わせると、彼女の生地である落帆が集住を強制された村落であったことがわかり、樺太アイヌと「日本人」という立場が入り組む自伝であることに気づかされる。少数民族自身のまとまった声の記録としては他に、札幌テレビの取材が証言としてまとめた『ヘンケとアハチ』(一九九四)が出ている。

以上、植民者二世、二世、「複数民族」の自伝を概観してきた。全般的な特徴として、自伝を自分史と位置づける作者がいるように、自己の経験をもとに物語るという文学的意識より、自身及び家族の過去を未来へ正確に伝える歴史的意識が強い。一方で、自伝であっても他者の視点での叙述や現在と過去を交差さ

せる方法など、小説的な趣向を試みている作品もある。自伝には私家版や各種文集に寄せられた短文も多いため、継続して調査を進めながら全体像を明確にしていきたい。

第三節 紀行文

紀行文と樺太文学の親和性は高い。三木露風「樺太紀行」(一九二三)、林美美子「樺太への旅」(一九三四)、正宗白鳥「北遊記」(一九三五)とそうそうたる面々が日露戦争後の樺太を訪ね、文章をのこしている。なかでも北原白秋(一八八五生)が一九二五年の樺太観光団(鉄道省主催)に参加した記録である『フレップ・トリップ』(一九二八)は紀行文としての「自由な文体」(山本太郎「『フレップ・トリップ』の文体——その躍動美について」)を模索した長編であり、実験性に富んだ「文学」として屹立している。それが戦後になると、長らく樺太への旅には厳しい制限がかかったこともあり、当地を取材する紀行文も絶えていた。そうした時代の数少ない紀行文から一点を挙げる。

・李恢成『サハリンへの旅』(一九八三)

自伝の小説でも名を挙げたイ・フェソンは、一九八一年の日本社会党北海道本部主催の募参団に同乗し樺太／サハリンを訪問する。同地に残る親類縁者との再会の旅であり、「自分自身が誰よりも先に事実を知るために必要な旅であった」¹⁴⁾。この旅は以後の各種ノンフィクションで提起される「サハリン残留韓国・

朝鮮人問題」を顕在化しただけでなく、東アジア諸地域に離散した同胞を書くという作家自身の自覚を促したように映る。それでは九一年からはどのような紀行文が書かれてきたのか。

ソ連解体後、数多くの作家たちが樺太／サハリンを旅しているだけでなく、その旅が樺太に関連する小説を書く契機となっている。小説の節で名を挙げた辻真先『サハリン脱走列車』、熊谷達也『氷結の森』、村上春樹『1Q84』、工藤正廣『チェーホフの山』には先行する作家自身の旅があり、長短様々であるが紀行文も残されている。戦前、例えば八木義徳の自伝的小説『海豹』との違いとしては、樺太への旅の経験が自伝的に小説化されるのではなく、あくまでも風土の描写や内容の一部に旅の経験が反映するに留まる点にある。それでは小説を照らし出す研究資料としてではなく、紀行文そのものの価値を考えると、どのような特徴が見出せるのか。以下、具体的な作品を三冊示しながら検討してみたい。

・田中水絵『奇妙な時間が流れる島 サハリン』（一九九八）

田中水絵（一九七一生）が書くのは一九九二年八月から九年七月までの間の複数の旅である。彼女は九三年から九四年にはユジノサハリンスタ教育大学に勤務しており、その文章からは現地の人たちの生の声が伝わってくる。

ふわふわと海峡を越え、サハリン島に渡った。その島では

奇妙な時間が流れていた。過去が消え去らず、現在と重ね合って流れていた。おまけに、その過去も現在も、私の国の過去と深く繋がっているらしかった。知らなかった憂うつな過去とぶつかった私は、不安になり、不快になり、逃げ出したくなった（二六一頁）

しかし、彼女は逃げ出すことなく樺太／サハリンの各地を訪れ、かつてのチェーホフのように住民一人一人と言葉を交わし、今と過去の声を謹聴してまわる。はじめから特定の目的を持った旅でないことが、逆に現地で出会った複数の民族の人生を浮かび上がらせる旅の記録になっている。

田中の場合は意図的でなかったかもしれないが、彼女の紀行文が捉えたような「複数民族」の姿は他の紀行文でも登場する。最も目につくのは残留韓国・朝鮮人の姿で、例えば朴慶南『あなたが希望です』（二〇一五）や姜信子『は生まれ、ふたたび』（二〇二一）に所収の旅は在日韓国人二世、三世の立場から樺太／サハリンの「朝鮮人」の今と歴史に迫る。他に三田英明『忘却の島サハリン 北方異民の「いま」を紀行する』（一九九四）は「総人口の五パーセントを占める韓民族の人たちや、日本女性たち、アイヌの人たち、ニプフやウイルクタの人たちを訪ね」（二一三頁）歩く。このような諸民族に対する関心は戦前の紀行文でもオタスの杜の訪問場面等に見られたが、ソ連解体後の紀行文ではなぜ彼ら／彼女らがそこにいるのか、歴史的経緯も含めて

取材され、対話相手の声を伝える努力がなされている。

・藤巻光浩『国境の北と日本人 ポストコロナリアルな旅へ』（二〇一九）

藤巻光浩（一九六四生）は「過去のコロナリアル・ツーリズムを反芻」しない樺太／サハリンへの旅の意義を探る。彼は旅の途上で出会った「梁さん」というガイドについて次のように書く。

これから、サハリンを訪れる日本からの観光客は少しずつ増えていくだろうが、この観光客が出会うべき人は、きっと彼のような人たちなのだ。「略」彼は、朝鮮人であり、日本人として生きたこともあり、ロシア人として暮らしながら、韓国を祖国と考えている（「略」）したがって国民国家によつてのみ自らのアイデンティティを語る語彙しかもたない「日本人」ととって、しっかりと出会うべき人なのだと言強く感じる（八三―八四頁）

小説や自伝が探求したように「ものごとを国境の両側からとらえる」（黒川創）ために、「朝鮮人」「日本人」「ロシア人」という概念自体を再考するために、「梁さん」のような人たちに出会おうという提言である。在りし日の「樺太」を追う旅ではなく、多くの「日本人」ととって学ぶべき人が住まう地域としての樺太／サハリン像が提起される。

・梯久美子『サガレン 樺太／サハリン 境界を旅する』（二〇一九）

九一年以降の紀行文の最も大きな特徴は、「観光」という言葉でまとめられる趣味的な事柄に焦点を当てた文章が目立つことであろう。例えば、鉄道についての宮脇俊三「韓国・サハリン鉄道紀行」（一九九二）、釣りに関する鍛冶英介「アマゾン・サハリン・嫩妓釣り紀行」（一九九八）のように。探検家の跡を追う相原秀起「新サハリン探検記 問宮林蔵の道を行く」（一九九七）も部分的には「観光」として読めてしまう。美術家の奈良美智が「サハリン／樺太Ⅰ」（二〇一七）に「日本の中心から離れれば離れるほど、なぜか自分の故郷に近づいていく気がする。西洋の東洋の中心から離れた辺境と呼ばれるところ、そこは自分にとって懐かしく感じる人々が暮らしている」（二一四頁）と書く「辺境」という要素さえも観光資源になり得るのが現在の樺太／サハリンではないか。

梯久美子（一九六一生）の旅は、辺境の鉄道・廃線を訪ねる旅であり、宮沢賢治を訪ねる旅である点で趣味的な旅である。一方で歴史を訪ねる旅であり、宮沢賢治の文学論であり、「複数民族」への視点も含む。総じて近年の紀行文の多様性を凝縮した旅とも読める。なお、梯が歴史を重視するのに対し、同時期に出版された若菜晃子の紀行文「サハリン描出」（「旅の断片」

二〇一九）では一度も樺太の歴史に触れられることがない。ソ連解体後の紀行文の意義は、樺太／サハリンに多様な価値を発見していることにあると思われるが、その過程で過去を書かないことを選択した紀行文もまたあらわれている。

ソ連解体後の紀行文の特徴をまとめる前に、回想の旅についても触れておこう。ここまで並べた旅にも回想が伴うものもあったが、植民者一世二世の再訪・帰郷を伝える紀行文は挙げてこなかった。これは九一年以降の大部分の紀行文において帰郷が扱われていない、正確には小説や自伝の一部に、あるいは文集に無数の短文が記されるに留まるためである。こうした帰郷者たちについては、テッサ・モリス＝鈴木木の紀行文「サハリンを回想する」（『辺境から眺める アイヌが経験する近代』二〇〇〇）が「このフェリーに同乗する人たちが、一九九六年夏のサハリンに、どのような反応を示すだろうか」（二三四頁）と観察し、帰郷そのものの意味を考察している。旅自体が主題になっているわけで、これは先の藤巻の紀行文と軌を一にする。回想の旅から趣味的な旅へ、近年の樺太紀行文は樺太／サハリンの価値の多様化を示す、と一応はまとめられ、加えて旅そのものの意味を問うメタな紀行文もまた誕生していることを心に留めておきたい。

第四節 詩歌俳句 その他

本節では樺太に関連する詩歌俳句について、詩、短歌、俳句の順に八〇年代以前の代表作を押さえた上で、九一年以降の作品の一端を捉えていく。また、ここまでに言及できなかったジャンルについても簡潔にはあるが、この節でまとめておきたい。

《詩》

樺太の詩と聞くと、早くは岩野泡鳴が「何の 為めに、僕、／樺太へ 来たのか 分らない」（『恋のしやりこうべ』金風堂、一九一五）と心境を吐露する詩や、宮沢賢治が妹の死を悼む「オホーツク挽歌」（一九二四）がまず思い浮かぶ。「てふてふが一匹鞭靱海峡を渡つて行つた」という安西冬衛の一行詩「春」（一九二九）を大陸の側からの樺太詩と見ることもできようか。他にも紀行文の箇所でも名を挙げた作家たちや、高橋新吉、野口雨情等、樺太を訪れた詩人は多い。なかでも少年時代を樺太で過ごした小熊秀雄（一九〇一生）の「飛ぶ樫 アイヌ民族の為めに」（『飛ぶ樫』前奏社、一九三五）は樺太アイヌを主人公に据えた長編叙事詩であり、戦前を代表する樺太の詩に挙げてよいだろう。このように戦前であれば著名な詩人について語ることが可能なわけだが、戦後になると先行論で詩はほぼ等閑視されている。ここではソ連解体後の代表作を挙げながらその特色を探るかたちで論を進める。

・中田敬二「さはりん島」(『私本新古今和歌集』一九九二)

だんだら落日／凍る針葉樹林帯／星づくよ／ふるさとにゆ
くひと／もがな／逃げまどう／ひと／ひとびと　ばかな／戦
車　ばかな／すたーりんと国境　かけこむ／役者／しんだ
きむさん／たより待つ海峡たち／つげやらん／旅客機が波
にただよつていと／しらぬやまじに　ばかな／高射砲ひ
とり／まどふと／おでつさにかえるあんどん／うくらいな
からきたいわん／さまざまの／うつくしい／流刑

中田敬二(一九二四生)は樺太を出自とし、第一詩集『埋頭』
(一九六八)にも「サハリン島」と題した詩を書いているように、
故郷の樺太を詩のモチーフとして反芻している。上記の引用は
詩集『私本新古今和歌集』所収の詩「さはりん島」(六二―六三
頁)全文である。厳しい自然、岡田嘉子と杉本良吉の越境事件、
墜落した大韓航空機、チェーホフ……、短い詩中に樺太／サハ
リンの歴史に伴う諸々の事象が浮かびあがる。この詩の背景に
は樺太の歴史だけでなく、「ふるさとに行く人もがな告げやらむ
知らぬ山路にひとりまどふと」の和歌がある。中田は樺太の歴
史や自らの経験をそのまま詩にするのではなく、時にチェーホ
フ『サハリン島』を関連づけ(『サハリン島』『旅のおわり・旅』
一九八七)、時に伊豆大島のような別の流刑地と並列しながら
(『島影I』『島影』二〇一〇)、樺太の意味を、樺太を出て放浪
することの意味を求めていく。なお、こうした中田の詩と樺太

の関わりについては『中田敬二詩集』(思潮社、二〇一七)収載
の水島英己「中田敬二を読む「宇宙の一粒の火」としての生存
と脱出」でも詳しく論じられている。

・花崎皋平『チュサンマとピウスツキとトミの物語』他(二〇
一八)

花崎皋平(一九三一生)は哲学者としてまず名が知られてい
よう。詩集『アイヌモシリの風に吹かれて』(小樽詩話会事務所
二〇〇九)を経て書かれた同書は、川越宗一も歴史小説『熱源』
で主人公の一人に据えたポーランドの学者プロニスワフ・ピウ
スツキと、その妻チュサンマを物語詩の形式で伝える。加えて
現代の「私」とトミの物語が綴られ、詩は時間を超えて共生の
在り方を探し求める。

現代詩では他に「豊原駅前空襲」を含む宗美津子「浜辺の馬
サハリン・七歳の終戦」(一九九二)のような樺太での経験を書
いたものから、伊藤信吉「サハリン遠望」(『私のイヤリング』
一九九四)「サハリンの釣り」(『老世紀界限で』二〇〇一)のよ
うに未踏の土地への「未練いっぱい思い」を詩にする作品も
ある。また、詩は詩集以外にも自伝や紀行文のなかに挿まれて
いることもある。

幾つもの戦争による往来と／国による放棄という名の悪意
とが／何処ぞに見え隠れして／負け犬の遠吠えをして

みたり あるいは／素知らぬ旅人となってみたりしながら
／境界を跨ぐキャンパスの夢想を／個々に紡いでいる樺太
人とやら／私もその一人なのだろうと――

上記は工藤信彦が樺太に関する自身の文章をまとめた『わが
内なる樺太』（二〇〇八）の冒頭に置かれた詩「空に見るもの
樺太挽歌」（九頁）の一部分である。同詩は「知っている人が居
るというのも心細くなり／知らなくても日本人という普通の国
になって」とつづき、「あれがサハリン島／そこが私の生誕の地
／あのかたちが 樺太――」と閉じている。かたちとして夢想
するしかない「樺太」そのものへ贈られる挽歌。詩全般に関し
ては全体像とは言えない確認状況の故にまとめ難いが、戦争体
験を伝える詩に加えて物語詩が現在にも書かれていること、か
つ単に自身の経験を詩にするのではなく、中田敬二や工藤信彦
のように樺太とは何かを問う詩もまた生まれている。

《短歌》

短歌は戦前であれば斎藤茂吉「まもり来しわがまぼろしは無
くなりつ 樺太のやま火に燃えしかば」（『石泉』岩波書店、一九
五一）のような来島者の作品があり、樺太内の歌壇の活動も盛
んであったことは荒澤勝太郎『樺太文学史』に詳しい。歌人の
松村正直「樺太を訪れた歌人たち」（ながらみ書房、二〇一六）
も戦前の短歌の記憶を自身の旅の記録と共に伝えている。

それでは戦後の短歌はどうであろうか。まず一九八七年から
吟行会や歌集の刊行を進めてきた「樺太短歌」の活動があり、
同会からは合同歌集（例えば、樺太短歌会編『からふと 樺太
短歌会創立十五周年合同歌集』樺太短歌会、二〇〇一）の刊行
も定期的に行われた。他にも引揚げの後に発行された短歌誌「湖
笛」（林霞舟発行）など、戦後も短歌の営みは継続しているのだ
が、今回はその調査に至っていない。よって以下の叙述では本
論の対象である九一年以降に単行本として出版された作品を一
点挙げ、その上で他の歌集からも具体的な作品を提示しつつそ
の特徴をまとめた。

・久保田幸枝『短歌でたどる樺太回想』（二〇一六）

久保田幸枝（一九三七生）は自身の四十年來の短歌と樺太回
想を並べ、家族について、敗戦後の「ソ連一色」になった豊原
について、引揚げ後の生活について書いている。

「ユキエさん サンポタバマシヨ」小学生わが友なりしか
のロシア兵

たはぶれにマホロカ吸ひしかの町のあき家ほどの暗さを知
らす

日本人がいなくなった空き家は子どもたちの遊び場になり、
ロシアからの移住者の住居に変わった。少女にロシア兵の友人
ができる。片言の日本語の記憶、片言のロシア語の記憶。マホ

ロカはロシア煙草、「言葉よりも早く広まった」（三一頁）。空き家の暗さ、そこにロシアの灯がともり始める。

茫茫と三十年は過ぎにけりサハリンの郭公を聴きし朝より
ソウイエト化すすむサハリン映りをいよいよ遠き島となるべし

郷愁はつづく。作中にはソ連解体前に詠まれた歌も多い。三十年、そして「茫茫と」の歌を詠んでから再び流れた三十年以上の年月。ソウイエトという大実験さえ終わりを告げて、遠き島はわずかでも近き島になったのか。短歌は作家の思いをのせて記憶する。他の歌人の歌も以下、幾つか引いてみる。

残留を余儀なくされて祖国恋う同胞すでに七十歳越ゆ（金夏日『機を織る音』二〇〇三）

晩年の母が願ひしサハリンへの旅のこころを知る術はなし

（和田沙都子『月と水差し』二〇一四）

六十二年前を求めてさまよへど眞岡の町に追ふ影のなく
（林宏匡『ホルムスクの夕日』二〇一六）

長き長きさすらふ旅にも似たるかな我が樺太はあまりにも
遠し（三浦瀬火『白き太陽』二〇一七）

残留を強いられた同胞を思う歌がある。樺太を出自とする母の思いを知りたいと願う歌がある。六十二年を経て帰郷し過去をもとめる歌がある。しかし、樺太は遠い。戦後、墓参団等の帰郷が始まるまでの短歌はその遠さを嘆く歌が多かった。「樺太

は出生の地わが青春を埋めし地異国名に今はあるとも」（大塚陽子『遠花火』雁書館、一九八二）と詠んだ樺太敷香町生まれの歌人も思い出される。ここまでに引用した歌は必ずしも九一年以降の短歌ではなくソ連解体前につくられた短歌も含むが、「あまりにも遠し」の声は現在にも反響しているのではないか。

短歌の特徴をまとめるには詩と同様に全体像を把握できていないわけだが、樺太生まれの歌人たちは歌のかたちで在りし日の生活を描き出し、現在の心境を詠み、また、時に結社の活動を通してその記憶を分かち合ってきた。樺太文学には自伝的小説や自伝に望郷の思いを伝える作品は多いが、数多くの短歌がその思いを端的に伝えている。さらには樺太生まれでない歌人からも父母、祖父母、同胞を思う短歌が生まれている。

《俳句》

戦前の樺太における俳壇については、短歌と同様に荒澤勝太郎『樺太文学史』に詳しい。また、歌人ほどではないが河東碧梧桐、白田亜浪といった著名な俳人が渡樺、「国境の雲低うして虫そぞる」（白田亜浪『俳句の旅をゆく』北信書房、一九四六）のような句をのこしている。樺太に関する俳句と短歌をまとめた菊池滴翠編『樺太歳時記』（国書刊行会、一九八四）を読むと、東京から見て特異な気候である当地の風土をいかに俳句に読みこむか、例えば「葉月雪忽然と来て燦爛たり」（伊藤凍魚）のよ

うに、苦心の跡が見られる作品が並べられている。戦前の樺太俳句では他に一九一二年から一七年の間を樺太で過ごした山口誓子（一九〇一生）の『凍港』（素人社、一九三二）に収められた「凍港や旧露の街はありとのみ」「流水や宗谷の門波荒れやまづ」といった句が広く知られている。

戦後の樺太俳句は活況とは言えないものの、伊藤凍魚による俳句誌「氷下魚」（一九六三年まで）の活動を見ても、その活動が敗戦で終結を迎えたとは言えまい。また、帰郷者による望郷の句だけではなく、樺太に生まれて上敷香に抑留となった庄子真青海の「かさね臥し誰の骨鳴る結氷期」（『カザック風土記』卯辰山文庫、一九七六）のような樺太抑留の俳句も「戦後」に書かれていることを記憶しておきたい。それでは九一年以降の作品はどうだろうか。著作を一冊、次に幾つかの俳句を挙げて様相の一端を示す。

・松王かをり『最果ての向日葵 俳人藤谷和子に聞く』（二〇二一）

藤谷和子（一九二七生）は樺太真岡の生まれ、戦後「氷下魚」にて句作の経験を積む。「最果ての向日葵」は同じ俳人の松王かをりによるインタビューをまとめたもので、そこに樺太の話や俳句が出てくる。

八月をひとめぐりせし白半衿

雲みんな露西亜へ流れ返り花

短歌以上に文字数の少ない俳句では一読して樺太に関連する句なのか、わからない作品も多い。「八月を」の句には「姉没後四十年を経て」の前置きがある。

この姉つて、すぐきれいい好きで潔癖で。昔の人だから着物を着ていたでしょ。毎日、着物の半衿を取り替えて洗つては、またアイロンかけて。「略」「姉」と「白い半衿」は、「八月」と一体化してしまう。だから「ひとめぐりせし」と。それから私「八月」と言うのと、どうしても戦争のことを思い出して（九八頁）

ソ連軍の上陸直後に亡くなった姉への思いが八月をめぐる白い半衿に託される。

鳥けもの草木を言へり敗戦日

サハリンの夕陽を割つて鯨浮く

「鳥けもの」の句について藤谷は「私の中ではね、「言う」ということは「思う」ということだから。「言へり」というのは、樺太にいたときの鳥や草や獣や友だちや先生や、その全部を「思う」ということなの」（一〇四―五頁）と語る。「サハリンの」の句は二〇一八年の作、九十歳を過ぎた俳人の心に浮かぶ情景だろうか。樺太／サハリンのかたち自体が魚影のようでも、鯨の尾のようでもある。他の俳人の作品も幾つか引いてみる。短歌と同様に、個々の句は必ずしも九一年以降の創作ではない。

サガレンの海鬘深く敗戦日（佐野農人『海鬘』一九九三）

白足袋や海峽二つ渡り来し（小檜山繁子『流水』二〇〇五）

オホーソックの恨みは多し夏
の海（安部洋子『オホーソックの
灯り』二〇一五）

浜ばらや耳底を衝く朝鮮語（小松健一『写真家の心 詩人
の眼』二〇二〇）

北海道の側から樺太を眺めるまなざしがある。宗谷海峽、津軽海峽を渡り来し白足袋もある。「オホーソックの」の句は、自伝の節で紹介した樺太アイヌの安部洋子による句、「恨み」の語が重い。また、「浜ばらや」の句のような現代の樺太／サハリンを訪問しての俳句も増えてきている。「浜ばら」は「浜薔薇（はまなす）」、宮沢賢治の詩にも書かれた樺太を代表する晩夏の花で百年ほど前の旅と現代の旅が一つの季語でつながる。と、ここに懐古趣味に浸らせない残留朝鮮人の声という現実が響き、一句の味わいを複雑にしている。

俳句も全体像を把握するには調査不足ではあるが、樺太を出自にする俳人だけでなく、北海道からの視点、旅行者の視点、と様々なまなざしが過去と今の樺太／サハリンを捉えていることは確認できる。俳句は約束として季語を用い、一つの語の意味を何人もの俳人が長い時間をかけ深く広げていく。「敗戦日」「白足袋」「浜ばら」と、時間に物に草花に新旧固有の樺太の経験が取り合わされ、その意味の趣をまた次の世代へと投げかけ

ている。

詩歌俳句全体についてまとめよう。総じて全体像を捉えられておらず、各ジャンルの一端を示すに留まった。しかしながら、戦後の樺太に関する詩歌俳句については先行論で触れられて来なかったジャンルであり、拙論が考察を促す一助になればと思う。特徴としては、特に詩では回想だけでなく、中田敬二が樺太自体の意味を問い、花崎皋平が「複数民族」の視点から物語詩「チュサンマとピウスツキとトミの物語」を書くような、小説や紀行文の特徴とも部分的に通じる試みがなされている。短歌、俳句は樺太で過ごした経験を懐かしみ、後世に残そうとする回想が中心であるが、一方でつくり手の変化はあり、父母の記憶を、「本土」から望む樺太を、旅で歩いた今の樺太／サハリンを詠んだ歌や俳句も出ており、なかでも旅行詠については緩やかにでも増えていくことが予想される。歌人の心、俳人の眼が何を捉えていくのか。自伝や文集中の短文に組み込まれていることも多いジャンルであるから、まずは収集と全体像の把握に努めたい。

さて、詩歌俳句については以上であるが、まとめに入る前に書き残しているその他の文学のジャンルについて二つ、また別のメディアについて触れておく。

一つ目は広義の児童文学について。自伝の節で神沢利子の名と数作を挙げたが、戦後は他に豊原生まれの井上二美（一九二二生）がロシアの少女との交流やソ連占領下の樺太／サハリンに生きる人々を『サハリン物語 イヌ佐藤の星座』（一九八八）に書いている。九一年以降になると物語作品ではなく、歴史的な学びのための作品、例えば関屋敏隆『まぼろしのデレン 間宮林蔵の北方探検』（二〇〇五）が書かれているが、全体として数が少ない。なお、必ずしも児童向けではないが、中村チヨ（口述）村崎恭子編『ギリヤークの昔話』（一九九二）のような少数民族による伝承の活字化もされている。

二つ目はノンフィクションについて。こちらは児童文学とは違つて数多くの書籍があることは本論末尾の「単行本出版年表」が示す通りである。文学作品か否かとなると検討が必要だが、升本喜年『女優 岡田嘉子』（一九九三）、野添憲治『樺太（サハリン）が宝の島と呼ばれていたころ 海を渡った出稼ぎ日本人』（二〇一五）など、伝記から聞き書きまで、樺太に関わった人々の心情を伝えている。

加えて、ジャンルではなく文学以外のメディアについて。おそらくこの三十年ほどで樺太／サハリンを広い世代に伝えた最大の創作は、アニメ化もされている野田サトルの漫画『ゴールデンカムイ』（集英社、二〇一四―二二）であろう。日露戦争帰りの元兵士とアイヌの少女を主役に据えた冒険活劇で、舞台の

中心は北海道であるが、途中「樺太編」が描かれる。その他のメディアでも、真岡郵便局の悲劇を扱ったテレビドラマ『霧の火』（脚本は竹山洋、二〇〇八年八月二五日）や演劇『フレップの花、咲く頃に』（脚本・山田百次、演出・斎藤歩、二〇一八初演）『チェーホフも鳥の名前』（脚本・演出ごまのはえ、二〇一九初演）のように、近年に限っても樺太の存在は各方面の想像力に刺激を与えている。その横断的な影響や今後の展開について注視していきたい。

おわりに

一九九一年以降の樺太文学を概観した結論として以下の三つの変化を提示し、変遷と特色のまとめとする。

一点目は視点の変化である。子どもの視点から家族の生活を語ることは戦前の小説から見られたが、戦後はそのかたちが定着化していく。九〇年代以降の作品では植民者一世の作品が稀になり、少年少女の時期を樺太で過ごした作家による等身大の「回想」が自伝的小説でも、自伝でも主流になる。また、視点の変化には歴史小説『熱源』、物語詩『チュサンマとピウスツキとトミの物語他』のような「日本人」から少数民族の視点への変化も含まれる。

二点目はモチーフの変化である。戦後、ソ連占領下での生活や引揚げ、また「引揚者」の心情を書く小説が増加した。また、

それだけでなくソ連解体後、樺太は自伝的作品を中心とした「回想」の場であるだけでなく、紀行文を中心に釣りや探検といった趣味的な好奇心を満たす場にもなっていく。開拓や戦争体験だけでなく、チェーホフ、岡田嘉子、石油開発など、樺太に関連する様々な事象が文学の資源として掘り起こされていく。その過程で九〇年代以降に架空戦記の舞台に選ばれ、幾つもの「空想」が紡がれたことは本文で示した通りである。

三点目は書き手の変化である。これは視点やモチーフの変化にも重なるが、自伝において植民者二世以降の者たち、あるいは「日本人」以外の書き手たちがあらわれている。また、戦前の樺太を経験していない「樺太文学」の書き手もあらわれている。他にもプロからアマチュアへと書き手の変化もジャンルを問わず増加しており、本論では扱わなかった電子書籍やインターネット上のみでの発表が増えている現在、この傾向はつづくであろう。

最後に、戦後の樺太文学から私たちが何を見出せるのか、一つの期待を挙げておこう。樺島昌夫（一九三二生）は樺太落合町の生まれ、一九四五年の引揚げまでの少年時代について書いた小説『銀色の記憶』（二〇一七）の終盤に次のような述懐がある。

「引揚げ」という言葉が使われたが、父は別として、昭たちは、母をはじめとして、みんな樺太生まれであって、実

際には引揚げ者ではなく、戦争から避難のため、やむなく故郷を離れる難民であった（一一四頁）

本論では「引揚げ」という言葉を当然のように選択して使用してきたわけだが、樺太を出自とする人の文章を読み進めると、「引揚げ者」ではなく「難民」だ、というような既存の「当たり前」を揺るがす言葉の使い方に会うことがある。他にも八月十五日以降に土地を追われ、空襲を体験した人々にとつての「戦争」「戦後」とは何か。そもそも「樺太」「サハリン」という二つの名はどのように彼ら／彼女らに響くのか。そして「日本人」「ロシア人」とは何か。樺太文学の記憶は「日本人」の集合的記憶との「ずれ」が時にあり、だからこそ切実な問いかけが生まれる。個々の回想・空想から「樺太人」の心情・表象へ、思索をつづきたい。

樺太文学 単行本出版年表

一九九一年以降の樺太文学の全体像を捉えるという本論の目的のためにも単行本出版年表を付しておく。樺太に関する書籍の目録であればインターネット上にも、全国樺太連盟による「資料アーカイブ」^[6]があり、歴史学者の中山大将による「サハリン／樺太史研究文献DB」^[7]がある。他にも国立国会図書館サーチ等の検索や出村文理「樺太関係主要文献目録（邦文編・一九四

六（昭和二一）年以降刊行分」（『文献探索人』第十巻、二〇一

〇年一月）のような幾つかの目録を加えればある程度の出版の概観を捉えられる。それらに対して以下の年表ではインターネットでの検索だけでは辿りつきにくい諸作を含めて、文学という観点から発行年順に並べている。未見の作品もあつて汗顔のいたりであるが、自らを含めて今後の研究の参考文献となればと思う。本の選択については以下の簡条書きの通り、今後修正も加えながら完成度を高めていきたい。

・単行本の刊行年月、作者「書名」出版社、《ジャンル》の順に記述する。

・《ジャンル》は、本文に合わせて小説、自伝、紀行文、詩歌俳句（詩）「短歌」「俳句」で表記）、ノンフィクション、児童文学、その他、不明で分類している。

・私家版（ここでは発行者が本人の図書）は原則除き、同窓会・同期会等の編による文集、「樺太短歌」発行の合同歌集等についても掲載から外している。

・ノンフィクション作品は「樺太文学」に合致しない作品もあろうが、題目の記述だけでも樺太への年代による関心事項が伝わると思っている。

・その他、専門書、旅行ガイド、再刊・復刻本、雑誌、翻訳書、電子書籍のみの作品は原則除外している。

一九九一年	一月	真起のり子『カチューシャの歌』なつかしく サハリンの想い出』響文社 《自伝・小説》
	一月	林亨柱『サハリンからのレポート 棄てられた朝鮮人の歴史と証言』御茶の水書房 《ノンフィクション》
	二月	中島欣也『幕吏 松田伝十郎のカラフト探検』新潮社 《ノンフィクション》
	二月	池澤夏樹『南島島特別航路』日本交通公社出版事業局 《紀行文》
	四月	宗美津子『浜辺の馬 サハリン・七歳の終戦』土曜美術社出版販売 《詩》
	四月	阿部一男『混沌の日々 嗚呼、樺太庁警察官練習所』北海道出版企画センター 《自伝》
	四月	岸本葉子『さよならニナード サハリンに残された人々』凱風社 《ノンフィクション》
	五月	小松功『ああサガレンの秋たけて』日刊道路通信社 《小説》
	五月	宗美津子『サハリンの秋の日に 平和交流と回想と』七月堂 《その他》
	七月	佐藤れい子『ロスケタンポポ』日本農文学会 《小説・詩》
	七月	伊藤孝司『写真記録 樺太棄民 残された韓国・朝鮮

人の証言』ほるぷ出版《ノンフィクション》

八月 中山茅集子『かくも熱き亡霊たち 樺太物語』影書房

《小説》

八月 中田敬二『私本新古今和歌集』思潮社 ※「さはりん島」

所収《詩》

九月 林えいだい『証言・樺太朝鮮人虐殺事件』風媒社 ※

増補版は風媒社、一九九二年刊《ノンフィクション》

九月 宮脇俊三『韓国・サハリン鉄道紀行』文藝春秋《紀行文》

《文》

十一月 福富節男『デモと自由と好奇心と』第三書館《自伝・その他》

《その他》

一九九二年

三月 北海道日ソ友好文化会館編『サハリン 沿海州の旅から

「ロシアの文化」紹介シリーズ23』北海道日ソ友好文化会館《紀行文・その他》

《その他》

五月 栗原透『サハリン・北方四島からのメッセージ』四国

写植出版制作室《紀行文・ノンフィクション》

六月 李恢成『流域へ』講談社《小説》

六月 川辺為三『サハリンの声』講談社《小説》

六月 高橋義夫『かくれんぼの森』創樹社 ※短文「サハリンの金歯」「カラフト 発見した人とされた人」所収

《小説》

《紀行文・その他》

七月 大沼保昭『サハリン棄民 戦後責任の点景』中央公論社

社《ノンフィクション》

七月 高木健一『サハリンと日本の戦後責任』凱風社《ノンフィクション》

《小説》

九月 渡辺毅『ワカソの棲む湖』鳥影社《小説》

九月 浅井淳子『たつたひとりでクリルの島へ ホームステイでサハリン、北方領土を行く』山と溪谷社《紀行文》

九月 日本脚本家連盟編『テレビドラマ代表作選集 一九九二年版』日本脚本家連盟 ※テレビドラマの脚本・市川森一「サハリンの薔薇」(ドラマ放送は一九九一年十一月)所収《その他》

《その他》

十月 樺太アイヌ史研究会『対雁の碑 樺太アイヌ強制移住の歴史』北海道出版企画センター《ノンフィクション》

十一月 中村チヨ(口述)、村崎恭子(編)、ロバート・アウス

テリッツ(採録・著)『ギリヤークの昔話』北海道出版企画センター《その他》

一九九三年

三月 佐藤大輔『征途 1 衰亡の国』トクマノベルズ ※

「2 アイアン・フィスト作戦」は同年八月、「3 ヴィ

クトリー・ロード」は一九九四年二月刊《小説》

《小説》

《小説》

《小説》

《小説》

《小説》

《小説》

- 六月 金丸友好『素顔のサハリン千島』連合出版《紀行文》
- 七月 升本喜年『女優 岡田嘉子』文藝春秋《ノンフィクション》
- 十一月 西木正明『丁半国境』文藝春秋《小説》
- 十一月 吉田たかし『海峡の少年 1945・真岡・ホルムス』光陽出版社《小説》
- 十二月 田中了『サハリン北緯50度線 続・ゲンダース』草の根出版会《ノンフィクション・その他》
- 一九九四年
- 一月 大國喬『サハリン紀行』日本図書刊行会《紀行文》
- 一月 大石英司『ナイトメア奪回作戦 上』講談社 ※下巻は同年五月刊《小説》
- 三月 角田房子『悲しみの島サハリン 戦後責任の背景』新潮社《ノンフィクション》
- 三月 藤村久和編『ヘンケとアハチ』札幌テレビ放送《ノンフィクション・その他》
- 四月 西木正明『間諜二葉亭四迷』講談社《小説》
- 四月 栗野仁雄『サハリンに残されて 領土交渉の谷間に棄てられた残留日本人』三一書房《ノンフィクション》
- 四月 田中了編『母と子でみる戦争と北方少数民族』草の根出版会《ノンフィクション》
- 五月 三田英彬『忘却の島サハリン 北方異民の「いま」を紀行する』山手書房新社《紀行文》
- 五月 河毛二郎『逆風順風』日本経営者団体連盟広報部 ※紀行文「サハリン感傷の旅」所収《その他・紀行文》
- 六月 北方謙三『林蔵の貌 上・下』集英社《小説》
- 八月 海老原一雄『炎の海峡 小説間宮林蔵 続』新人物往來社 ※前巻は一九九〇年刊《小説》
- 九月 李恢成『百年の旅人たち』新潮社《小説》
- 十月 土居良一『過去からの追跡者』講談社 ※「ネクロポリス」(講談社、一九八九年)に加筆改題《小説》
- 十月 木原直彦『樺太文学の旅 上・下』共同文化社《その他》
- 十一月 伊藤信吉『私のイヤリング』青蛾書房 ※詩「サハリン遠望」所収《詩》
- 一九九五年
- 四月 徳田耕一『サハリン 鉄路1000キロを行く』日本交通公社出版事業局 ※作者は他にも「サハリン」の旅行ガイドを出版している《紀行文》
- 四月 羅門祐人『鋼鉄の嵐 昭和大戰勃発!!!1937』サンマーク出版《小説》
- 五月 奥田博昭『サハリンの少年 北の家族の敗戦日記』社

会思想社 《自伝》

五月 太田勝三編『樺太一人旅 夢の大泊・豊原』南樺太問

題研究所 《紀行文・その他》

六月 長瀬隆『微笑の沈黙』晩声社 《小説》

六月 川嶋康男（文）、大宮健嗣（絵）『死なないで！ 19

45年真岡郵便局「九人の乙女」農山漁村文化協会

《ノンフィクション・児童文学》

八月 渡邊國武『この信念だけは曲げられない 望郷樺太』

波 《自伝》

九月 谷川美津枝『女たちの太平洋戦争 北の戦場樺太で

戦った乙女たちの生と死』光人社 《ノンフィクション》

十一月 松田静徳『樺太ものがたり』ほおずき書籍 《自伝》

一九九六年

一月 道下匡子『ダスピターニヤ、わが樺太』河出書房新社

《ノンフィクション》

二月 黒川創編『〈外地〉の日本語文学選2 満州・内蒙古／

樺太』新宿書房 《詩・小説》

二月 渡辺毅『ぼくたちの〈日露〉戦争』邑書林 《小説》

三月 捧良二三『留萌沖の悲劇』近代文芸社 《不明》

四月 ビートたけし『佐竹君からの手紙 サハリン篇』太田

出版 《小説》

六月 小池省二『樺太 戦禍の町で 戦後五十年の回想』近

代文芸社 《自伝》

七月 日ロフェリー定期航路利用促進評議会編『船で行くサ

ハリンおもしろ旅事情』北海道二十一世紀総合研究所

《紀行文》

一九九七年

一月 坂田卓雄『消し忘れの狂詩曲 チェーホフの「シベリ

ア、サハリンの旅」を一〇〇年後にたどる』創樹社 《紀

行文》

三月 梅木孝昭『サハリン 松浦武四郎の道を歩く』北海道

新聞社 《紀行文》

四月 三木邦成『サハリンに揺れた日本の灯台』日本図書刊

行会 《自伝》

五月 相原秀起『新サハリン探検記 間宮林蔵の道を行く』

社会評論社 《紀行文》

五月 島津瑞穂『ジャコシカの古里 50年目の樺太・泊居

町訪問記』そうぶん社 《紀行文》

八月 辻真先『サハリン脱走列車』講談社 《小説》

一九九八年

一月 鍛冶英介『アマゾン・サハリン・嫩妓釣り紀行』北海

道新聞社《紀行文》

一月 源鬼彦『句集 海峽』東京四季出版《俳句》

六月 矢矧零士、秋月達郎『修羅の艦隊6 満州・樺太 大

激闘』コスミックインターナショナル《小説》

七月 松元省平『静謐のサハリン』南船北馬舎《紀行文・写

真集》

一九九九年

五月 大関保『アジアの山旅』穂高書店《紀行文》

六月 渡辺毅『少年たちの樺太 マイとユンジの約束』蒼洋

社《小説》

七月 北海道新聞社編『ムクゲの「祖国」から 共同取材

北海道新聞・東亜日報』北海道新聞社《ノンフィク

ション》

九月 内田康夫『氷雪の殺人』文藝春秋《小説》

九月 残間正之『だからロッドを抱えて旅に出る』樺出版社

《紀行文》

十一月 田中水絵『奇妙な時間が流れる島サハリン』凱風社

《紀行文》

二〇〇〇年

二月 平沢是曠『越境 岡田嘉子・杉本良吉のダスピター

ニヤ』北海道新聞社《ノンフィクション》

二月 水島冬雲『小説 青春の繹ぎ目』日本図書刊行会 ※

作者には樺太関連の小説と思われる『追憶の淵』（文芸

社、二〇〇六年）もあるが未見《小説》

四月 歌川令三『渡る世界は鬼もいる 地球紀行』中央公論

新社《紀行文》

七月 テッサ・モリスル鈴木『辺境から眺める アイヌが経

験する近代』みずず書房 ※紀行文「サハリンを回想

する」所収《その他・紀行文》

岩川華『在りし日のサハリン』文芸社《小説》

二〇〇一年

三月 浜練太郎『サハリン島の群来物語 トーニヤへ』東銀

座出版社《小説・その他》

四月 浅井タケ（口述）、村崎恭子（述）『樺太アイヌの昔話』

草風館《その他》

六月 林啓介『樺太・千島に夢をかける 岡本草庵の生涯』

新人物往来社《小説・ノンフィクション》

七月 吉翔、片山通夫『サハリン物語 苦難の道をたどった

朝鮮人たちの証言』リトル・ガリヴァー社《ノンフィ

クション》

八月 太田勝三『樺太回想録 終戦時の真実と最新事情』文

芸社 《ノンフィクション》

八月 奈賀悟『日本と日本人に深い関係があるババ・ター

ニヤの物語』文藝春秋 《ノンフィクション》

八月 佐藤照幸『遠い記憶をたどって サハリンとイーハ

トーヴで育った少年』新風書房 《不明》

十月 浜野安宏『小説さかなかみ』廣済堂出版 《小説》

十一月 伊藤信吉『老世紀界隈で』集英社 ※詩「サハリンの

釣り」所収 《詩》

二〇〇二年

一月 乾浩『北夷の海』新人物往来社 《小説》

四月 大野秀野『荒波を越えて』文芸社 《自伝》

九月 黒川創『イカロスの森』新潮社 《小説》

十月 小林篤司『ソ連市民になった二年間』愛生社 《自伝》

二〇〇三年

一月 杉山四郎『武四郎碑に刻まれたアイヌ民族 民族の復

権をめざして』中西出版 ※最新の増訂新版は二〇二

〇年刊 《ノンフィクション》

一月 敷島悦朗『秘境ごくらく日記 辺境中毒オヤジの冒険

指南』JTB 《紀行文》

四月 山田恵子『樺太へ、樺太師範学校へ』新風舎 《不明》

四月 川嶋康男『九人の乙女一瞬の夏』終戦秘話 樺太・真

岡郵便局電話交換手の自決』響文社 ※一九八九年恒

友出版刊の「九人の乙女」はなぜ死んだか』の改題増

補。《ノンフィクション》

四月 清水一行『家族のいくさ』光文社 ※樺太移住の叙述

は序盤のみ 《小説》

六月 井椋有紀『ロシア・ビギナーのサハリン紀行』文芸社

《紀行文》

八月 金夏日『機を織る音』皓星社 ※「旧樺太」三首所収

《短歌》

九月 島田雅彦『エトロフの恋 無限カノン3』新潮社 《小

説

十二月 工藤英二『極北の大河に巨大鱒を追う ルアーフィッ

シング原野紀行』彩図社 《紀行文》

二〇〇四年

六月 佐藤忠悦『南極に立った樺太アイヌ 白瀬南極探検隊

秘話』東洋書店 ※増補新版は青土社、二〇二〇年刊

《ノンフィクション》

六月 飯田和夫『激動の樺太より生きて祖国に帰還して』鳥

影社 《自伝》

七月 本間昭南『雪の街のシズ子さん』碧天舎 《不明》

- 九月 奥山真『回想 星空の美しい樺太』展望社《自伝》
- 十一月 佐藤れい子『おくつき 佐藤れい子作品集』現代図書
《小説》
- 十一月 村上春樹、吉本由美、都築響一『東京するめクラブ
地球のはぐれ方』文藝春秋《紀行文》
- 二〇〇五年
- 一月 関屋敏隆『まぼろしのデレン 問宮林蔵の北方探検』
福音館書店《その他・児童文学》
- 一月 丸山重『樺太戦記 個人戦記録』東京図書出版会《自
伝・ノンフィクション》
- 三月 吉岡康『敷香市街地図』文藝書房《小説》
- 四月 宗美津子『草色の轍』山脈文庫 ※詩「遡る樺太のフ
レップ酒」所収《詩》
- 五月 松田静惇『樺太ものがたり 続』アイワード《自伝》
- 六月 李恢成『地上生活者 第一部北方からきた愚者』講談
社 ※第二部は同年、第三部は〇八年、第四部は一二年、
第五部は一五年、第六部は二〇年刊《小説》
- 六月 吉武輝子『置き去り サハリン 残留日本女性たちの六
十年』海竜社《ノンフィクション》
- 六月 市原麟一郎『いのちかがやく旅 子どもに語る戦争た
いけん物語』リーブル出版《自伝・児童文学》
- 七月 山口幹雄『少年Y 八百余日の軌跡』文芸社《自伝》
- 八月 工藤威『遙かサハリン島』群青社《小説》
- 八月 小川映一『樺太・シベリアに生きる 戦後60年の証
言』社会評論社《ノンフィクション》
- 九月 李恢成『四季』新潮社《小説》
- 九月 片山通夫『サハリン』未知谷《写真集・紀行文》
- 十一月 佐々木武四郎『長き不在の後に』《回想》樺太・シベリ
ア・カザフスタンの十三年』自游人舎《自伝》
- 二〇〇六年
- 一月 三橋郁雄、川村和美『北東アジア新発見伝 環日本海
旅日誌』博進堂《紀行文》
- 二月 林吉男『樺太人』叢文社《ノンフィクション・その他》
- 三月 高橋是清『道の分かれぬ和議 北海道を救った南樺太』
近代文芸社《小説》
- 四月 丸山重『1200日のサハリン捕虜記』東京図書出版
会《自伝》
- 八月 関野吉晴『北方ルート サハリンの旅』小峰書店《紀
行文》
- 十一月 多和田葉子『海に落とした名前』新潮社 ※「U.S.+S.R.
極東欧のサウナ」所収《小説》

二〇〇七年

一月 熊谷達也『氷結の森』集英社 《小説》

二月 姜信子『うたのおくりもの』朝日新聞社 《紀行文》

五月 崔吉城『樺太朝鮮人の悲劇 サハリン朝鮮人の現在』

第一書房 《ノンフィクション》

五月 市原麟一郎『いのちよみがえる海』リーブル出版 《小

説・児童文学》

五月 大石英司『サハリン争奪戦 上・下』中央公論新社

《小説》

七月 川畑晶資『人生「三万日」の軌跡 挑戦なくして未来

なし』中央公論事業出版 《自伝》

七月 小玉かよ『敷香の海鳴り いくさ火に追われて』オホー

ツク書房 《自伝》

十月 菅谷充『覇王の連合艦隊』実業之日本社 《小説》

十一月 山本淳一『サハリン 旅のはじまり』清流出版 《ノン

フィクション》

十二月 北原文雄『朔北サハリン青春伝』鶴書院 《小説》

十二月 鈴木喜一『日本辺境ふらり紀行』秋山書店 《紀行文》

十二月 松田静徳『サハリン抑留七百九十八日』文芸社 《自伝》

二〇〇八年

一月 李炳律『サハリンに生きた朝鮮人 ディアスポラ・私

の回想記』北海道新聞社 《自伝》

一月 大石英司『北方領土奪還作戦1』中央公論新社 《小説》

二月 尾崎幸信『樺太開拓にかけた男』文芸社 《自伝》

二月 前川恵司『帰郷 満州建国大学 朝鮮人学徒 青春と

戦争』三一書房 《ノンフィクション》

四月 横山信義『樺太沖海戦1 鋼鉄の海嘯』中央公論新社

※続巻は同年五月《小説》

五月 時田政美『サハリン・郷愁の地へ』鳥影社 《自伝》

九月 羅門祐人、中岡潤一郎『異史・第二次大戦4 樺太奪

還作戦1』経済界 《小説》

十一月 工藤信彦『わが内なる樺太 外地であり内地であった

「植民地」をめぐる』石風社 ※詩「空に見るもの

樺太挽歌』所収《その他・詩》

十二月 岩城紈彦『母の嫁ぐ日』文芸社 《小説》

二〇〇九年

二月 工藤敏行『樺太、わが心の故郷』牧歌舎 ※改定改題

版『樺太、永遠なる大地』は牧歌舎、二〇一九年刊《紀

行文・その他》

二月 辻井喬『遠い火花』岩波書店 《小説》

二月 佐藤巨『樺太わが故郷 国境の鳥 回想録』トムズ出

版部《自伝》

- 五月 村上春樹『1Q84 a novel BOOK 1 4-6月』新潮社 ※同作の「2」は同時刊行。「3」は二〇一〇年四月刊《小説》
- 十月 桜木紫乃『凍原』小学館 ※完全改稿の『凍原 北海道警釧路方面本部刑事第一課・松崎比呂』は小学館文庫、二〇一二年刊《小説》
- 十一月 財団法人北海道文学館編『サハリンを読む 遙か(樺太)の記憶』北海道立文学館《その他》
- 二〇一〇年
- 二月 さかいみち子『紫の星』文芸社《自伝》
- 四月 箕浦ヒナ子『五色の虹よ』文芸社《自伝》
- 四月 田崎健太(文)、下田昌克(絵)『辺境遊記』英治出版《紀行文》
- 五月 中田敬二『鳥影』思潮社《詩》
- 五月 大澤榮『汽笛茫茫として鳴り止まず ヒトノイッショウハ汽笛トトモニアル』蓮の花ぶんか舎《詩》
- 七月 園田豪『オホーツクの鮭』郁朋社《小説》
- 八月 片山通夫『追跡!あるサハリン残留朝鮮人の生涯』凱風社《ノンフィクション》
- 十月 保坂登志子・松尾美成編『こだま詩選集』洛西書院《詩》
- ※清水栄子「さよならサハリン」所収《詩》
- 十一月 小坂孝彦『ああ、樺太』無明舎出版《自伝》
- 十一月 詩森ろば『記憶、或いは辺境』創英社《小説》
- 二〇一一年
- 五月 螢ヒカル『韃靼海峡の月』はるかぜ書房《小説》
- 六月 勝野末子『海鷗』文藝春秋企画出版部 ※詩「夏のできごと」所収《小説・詩》
- 七月 帚木蓬生『蠅の帝国 軍医たちの黙示録』新潮社 ※短篇「樺太」所収《小説》
- 七月 重松清、澤口たまみ、小松健一『宮澤賢治 雨ニモマケズという祈り』新潮社 ※重松清の紀行文「サハリン紀行 雪の榮浜にて」所収《紀行文・その他》
- 十月 下川裕治『世界最悪の鉄道旅行 ユーラシア横断2万キロ』新潮社 ※加筆修正版は朝日新聞出版、二〇二〇年刊《紀行文》
- 十二月 姜信子『は生まれ 犀の角問わず語り』港の人 ※改題増補新版の『は生まれ、ふたたび いのちの歌をめぐる旅』は新泉社、二〇二一年刊《紀行文》
- 二〇二二年
- 三月 丸山重『樺太戦とサハリン捕虜の記』文芸社《自伝》
- 五月 永井正三郎『失われた樺太と満州の思い出』永井正三

郎自叙伝』ライフリサーチ・プレス 《自伝》

八月 小野寺英一『人間総業記 知床ウトロ絨毯』港の人

《自伝》

九月 『コレクシヨン戦争と文学17 帝国日本と朝鮮・樺

太』集英社 《小説》

二〇一三年

一月 兼坂千『生きられた我が樺太』文芸社 《自伝》

一月 渡辺祥子『魚と風とそしてサーシャ わたしはサー

シャ』桜美林大学北東アジア総合研究所 《自伝》

二〇一四年

三月 菊地明範、山田篤史編『高校生が見たサハリン・樺太

中央大学杉並高校研修旅行の記録』中央大学出版部

《紀行文》

二〇一五年

一月 天理教北海道教務支庁編『新・樺太伝道物語 サハリ

ンへ渡った伝道者達』養徳社 《その他》

二月 井戸田博子『想い出の樺太』文芸社 ※一九九二年九

月に私家版あり 《自伝》

二月 相原秀起『知られざる日露国境を歩く 樺太・択捉・

北千島に刻まれた歴史』東洋書店 《紀行文》

四月 安部洋子『オホーツクの灯り 樺太、先祖からの村に

生まれて』クルーズ 《自伝・俳句》

五月 仁木勝治『北の勇士・松田傳十郎 宗谷・サハリンの

調査に生涯をかけた幕吏』武蔵野書房 《ノンフィク

シヨン》

八月 喜多由浩『アキとカズ 遙かなる祖国』集広舎 《小説》

八月 菊池一隆『軀の中の環球』あるむ 《詩》

八月 浅野清『流転 ある樺太炭鉱夫の家族の物語』文芸社

《不明》

八月 近藤孝子、笹原茂、小川峯一『樺太（サハリン）の残

照 戦後70年 近藤タカちゃんの覚書』日本サハリ

ン協会 《不明》

九月 姜信子『はじまりはじまりはじまり』羽鳥書店 《紀行

文・その他》

十一月 小牟田哲彦『大日本帝国の海外鉄道』東京堂出版 ※

改訂新版は育鵬社、二〇二二年刊 《その他》

十一月 朴慶南『あなたが希望です』新日本出版社 《紀行文・

その他》

十一月 野添憲治『樺太（サハリン）が宝の島と呼ばれていた

ころ 海を渡った出稼ぎ日本人』社会評論社 《ノン

フィクション》

二〇一六年

三月 玄武岩、バイチャゼ・スヴェトラナ、後藤悠樹（写真）

『サハリン残留 日韓口百年にわたる家族の物語』高文

研《ノンフィクション》

四月 林宏匡『ホルムスキの夕日』湖笛会《短歌》

新井佐和子『サハリンの韓国人はなぜ帰れなかったの

か 帰還運動にかけたある夫婦の四十年』草思社《ノ

ンフィクション》

五月 伊藤健次『アイヌブリの原野へ 響きあう神々の話』

朝日新聞出版《写真集・紀行文》

六月 地本草子『子どもたちは狼のように吠える』早川書

房 ※続巻は同年八月刊《小説》

七月 井濶裕編『稚内・北航路 サハリンへのゲートウェイ』

国境地域研究センター《紀行文》

八月 バイオマストゥラブ編『樺太 九つの記憶の断片』デ

ザインエッグ社《自伝・ノンフィクション》

十月 久保田幸枝『短歌でたどる樺太回想』草場書房《短

歌・自伝》

十一月 相原秀起『ロシア極東秘境を歩く 北千島・サハリ

ン・オホーツク』北海道大学出版会《紀行文》

十一月 永井豪『海馬島脱出 子どもたちの敗戦記』まつお出

版《ノンフィクション》

十一月 松村正直『樺太を訪れた歌人たち』ながらみ書房 ※

紀行文『サハリン紀行』所収《紀行文・その他》

十二月 小林恒夫、天川悦子『国家なくして平和なし』〔樺太〕

〔満州〕故郷はるか』明成社《ノンフィクション》

十二月 有澤啓介『有澤南溟漢詩集』明徳出版社《詩》

二〇一七年

二月 片山通夫『サハリン逍遙 片山通夫写真集』群像社

《写真集・紀行文》

四月 三浦瀬火『白き太陽』文芸社《短歌・詩》

四月 遙土伸『孤高の日章旗2 北日本海！』経済界《小

説》

七月 樺島昌夫『銀色の記憶』文藝春秋企画出版部《小説》

七月 螢ヒカル『八月のアイコン』郁朋社《小説》

七月 平塚征緒『見捨てられた戦場』洋泉社《ノンフィク

ション》

七月 『ユリイカ八月臨時増刊号 総特集・奈良美智の世界』

青土社 ※奈良美智の紀行文『サハリン／樺太I・II』

所収《その他・紀行文》

八月 藤村武雄『知られざる本土決戦 南樺太終戦史 日本

領南樺太十七日間の戦争』潮書房光人社《ノンフィク

ション》

九月 公益財団法人北海道文学館『サハリン島』2017

アントン・チエーホフの遺産』北海道立文学館《その他》

二〇一八年

二月 後藤悠樹『サハリンを忘れない 日本人残留者たちの見果てぬ故郷、永い記憶』DUBOOKS《ノンフィクション・写真集》

二月 古川日出男『ミライミライ』新潮社《小説》

五月 花崎皋平『チュサンマとピウスツキとトミの物語他』未知谷《詩》

七月 佐藤守『ある樺太廳電信官の回想』青林堂《ノンフィクション・自伝》

八月 蛭ヒカル『日記』郁朋社《小説》

十月 藤村武雄『証言・南樺太最後の十七日間 知られざる本土決戦 悲劇の記憶』潮書房光人新社《ノンフィクション》

十月 藤井まさ子、藤井輝備『樺太戦火逃れて』葦の会出版委員会《不明》

二〇一九年

一月 中尾則幸『海わたる聲 悲劇の樺太引揚げ船「泰東丸」

命奪われた一七〇八名の叫び』柏艸社《ノンフィクション》

一月 藤巻光浩『国境の北と日本人 ポストコロニアルな旅

へ』緑風出版《紀行文》

七月 李義八(述)、長澤秀(聞き手)『遺言 樺太帰還在日本 韓国人会』会長、李義八が伝えたいこと』三二書房《自伝・その他》

七月 大谷和男『3つの知床岬とサハリン』風詠社《紀行文》

八月 中津川良子『わたしのであった戦争 樺太・恵須取を追われて』文芸社《自伝》

八月 川越宗一『熱源』文藝春秋《小説》

九月 桜井美智子『朝鮮から飛んできたたんぽぽ』書肆アルス《自伝》

十月 NHKスペシャル取材班『樺太地上戦 終戦後7日間の悲劇』KADOKAWA《ノンフィクション》

十一月 若菜晃子『旅の断片』KTC中央出版《紀行文》

十二月 嵐よういち『おそロシアに行ってきた』彩図社《紀行文》

二〇二〇年

一月 上原善広『異貌の人びと』河出書房新社《ノンフィクション》

- 二月 春南灯『北霊怪談 ウェンルパロ』竹書房 ※短篇「符号」所収《その他》
- 四月 梯久美子『サガレン 樺太／サハリン 境界を旅する』KADOKAWA 《紀行文》
- 四月 相原秀起『追跡間宮林蔵探検ルート サハリン・アムール・択捉島へ』北海道大学出版会 《紀行文》
- 四月 佐藤哲朗『スパイ関三次郎事件 戦後最北端謀略戦』河出書房新社 《ノンフィクション》
- 六月 及川雅之『北限の砦 南樺太終戦秘話』デザインエック 《小説》
- 八月 新井恵美子『「戦争」を旅する』展望社 《紀行文》
- 八月 小松健一『写真家の心 詩人の眼』本の泉社 ※俳句十句「サハリン回想」所収《その他・俳句》
- 九月 葛西泰行『飛ぶトナカイ』インプレスR&D POD 出版サービス 《小説》
- 二〇二二年
- 三月 鈴木仁・山名俊介『樺太庁長官物語』全国樺太連盟《不明》
- 四月 工藤威『工藤威作品集 木漏れ日』視点社《小説・その他》
- 五月 山内聖一郎『その他の廢墟』書肆梓 ※「樺太記」所収《詩》
- 五月 蛭七カル『韃靼海峡の月』はるかぜ書房《小説》
- 七月 藤谷和子(述)、松王かをり(著)『最果ての向日葵 俳人藤谷和子に聞く』中西出版《俳句・その他》
- 七月 Junモノエ『還らざる時のシジマに 過去を未来に6つの成長譚』Clover出版 ※短篇「やまね雨」所収《小説》
- 七月 大木茂『ぶらりユーラシア 列車を乗り継ぎ大陸横断、72歳ひとり旅』現代書館《紀行文》
- 八月 常陸之介寛浩『本能寺から始める信長との天下統一6』オーバerrapp ※本巻と続巻(二〇二二年一月刊)に「樺太開発」の章を所収《小説》
- 十月 浮穴みみ『小さい予言者』双葉社 ※短篇「稚内港北波堤」所収《小説》
- 十一月 小牟田哲彦『アジアの停車場 ウラジオストックからイスタンブールへ』三和書籍《紀行文》
- 二〇二二年
- 四月 金子遊『マクロネシア紀行「縄文」世界をめぐる旅』アーツアンドクラフツ《紀行文》
- 五月 武内優『うたと歴史でつづる樺太 私論・雨情の国境横断踏破考』幻冬舎メディアコンサルティング《ノン

フィクション》

八月 上野幹久「ある校長の樺太・台湾旅日記 日本統治時

代 祖父の記録から読み解く「領土」と先人の努力」

梓書院《紀行文・ノンフィクション》

八月 川嶋康男「彼女たちは、なぜ、死を選んだのか？ 敗

戦直後の樺太 ソ連軍侵攻と女性たちの集団自決」敬

文舎《ノンフィクション》

九月 柞刈湯葉「SF作家の地球旅行記」産業編集センター

※架空の紀行文「南側と呼ぶには北すぎる」所収《紀
行文》

注

(1) 参考文献について本文では論文末尾の「樺太文学 単行本
出版年表」に記載した書籍については頁数のみを挙げて出版
社名は省略する。その他本文に引用がなく、作品名のみ提示
する場合も出版社名を省略する。

(2) エレーナ・A・イコンニコヴァには、より広範な日本の作
家を扱った『20—21世紀日本文学の中のサハリンとクル
リ諸島 増訂第二版』（二〇二〇年五月、未訳。原題は
Сагагин и Курильские острова в японской литературе XX-XXI
веков. Монография）がある。著名な作家ごとにとまとめられて
おり、三島由紀夫、大江健三郎から野田サトルの漫画『ゴ—

ルデンカムイ』まで幅広く紹介されている。

(3) 神谷忠孝「本庄陸男 樺太との関わり」『国文学 解釈と鑑
賞』七〇巻二号、二〇〇五年二月

(4) 格清久美子「讓原昌子の青春と文学 朝北の植民地「樺太」
に生きて」『名古屋大学国語国文学』八九号、二〇〇一年一二

月

(5) 「樺太」の語が指す範囲は複雑だが、「北海道の北に位置す
る南北に長い島」のうち、日本領であった北緯五〇度以南の
地域をこの名で呼ぶことにする。また、現在では樺太よりサ
ハリンの呼び名が定着しているが、原則本論では樺太と表記
し、文脈の意味上、サハリンと使うべき箇所にはサハリンを
使用、あるいは樺太／サハリンと記述する。

(6) 吉田知子「サハリンでの一年」『朝日新聞』一九八八年六月
五日。参考は「サハリン時代」（中央公論新社編『少女たちの
戦争』中央公論新社、二〇二二年、一九六頁）

(7) 渡辺毅「ぼくたちの〈日露〉戦争」邑書林、一九九六年、
一七八頁

(8) 辻真先「鉄道ミステリ各駅停車 乗鉄80年 書き鉄40
年をふりかえる」交通新聞社、二〇二二年、一五〇頁

(9) 佐藤大輔『征途 愛蔵版』中央公論新社、二〇一七年、五
六七頁

(10) 長山靖生『日本SF精神史 幕末・明治から戦後まで』河

出書房新社、二〇〇九年、一〇七頁

(11) 黒川創「『習作』を離れるとき」『もどろき・イカロスの森
ふたつの旅の話』春陽堂書店、二〇二〇年、三〇二頁

(12) 同上書、二二五頁

(13) 李恢成「著者から読者へ」『サハリンへの旅』講談社文芸文
庫、一九八九年、四七九頁

(14) 一九四三年八月から樺太が「内地」としての扱いであった
ことを思うなら、樺太からの「引揚げ」は「内地からの引揚げ」
というさらに複雑な言葉になる。この点については、工藤信
彦「樺太引揚げ」管見 内地からの引揚げ（『わが内なる樺
太』石風社、二〇〇八年）に詳しい。

(15) 全国樺太連盟「資料アーカイブ」[http://kabaren.org/
shiryouchives/hokantoshishiryoun.html](http://kabaren.org/shiryouchives/hokantoshishiryoun.html)（二〇二二年十一月
十三日閲覧）

(16) 中山大将「サハリン／樺太史研究文献DB」[https://app.
cseas.kyoto-u.ac.jp/info/hb/meta/pub/G000031IkaratutoHIS2](https://app.cseas.kyoto-u.ac.jp/info/hb/meta/pub/G000031IkaratutoHIS2)
（二〇二二年十一月十三日閲覧）

（ふじた・ゆうじ 本学文学部准教授）